るも、火を打出るは、卽火の物に通徹（トホ）る由の名なり。照徹又は蒸徹など云る類是なり』

（日本書紀通釋第二の七九九頁）

大石千引（言元梯）寺田長興（太津可豆衛）敷田年治（音韻啓蒙下の五一丁）等、また火通の義とし、大槻文彥の『言海』にも、『火通（ホトホ）るの義か』といへり。

橘　成員（倭字古今通例全書）契沖（和字正濫要略五四丁）佐藤誠實（語學指南三の二六丁）物集高見（日本大辭林）等又『日本紀』の傍訓をあげてホの假名遣とせり。

此の他、『俚言集覽』本居宣長の『御國詞活用抄』第六會石川雅望の『雅言集覽』清水濱臣の『語林類葉』近藤眞琴の『ことばのその』落合直文の『ことばの泉』等もホの假名遣とせり。

二　ホトヲル

谷川士清　ほとをり　『神代紀』に熱又火熱をよめり。『古事記』同じ。火の折たる義なり。○『枕草紙』に「さるべき事もなきを、ほとをり出たまふさまこそあらめ」と書るは、恨をいへるをうけてさいへば、胸のほのほなるべし。

（倭訓栞）

まいば（蟠車）

一　マイバ

谷川士清　まいば　糸を蠶に移すまでに卷て置物をいふ。纏翳の義なるべし。撥車也といへり。『蜻蛉日記』に「白糸のまいくる」と屬けるは是にや。

（倭訓栞）

寺島良安の『和漢三才圖會』活版本五六二頁に『まいのは蟠車。撥車、撥桙、車桙。俗云未以乃波』とあり。

二　マヒバ

山岡俊明　まひは　舞。まひはは糸卷物なり。平き臺に柱一本を立、その上に十文字のくも手を入、その端に各柱四本を立、わくの如くして糸を卷。……

舞とのみもいひしにや『蜻蛉日記』上一兼家公長歌「天雲とのみたなびけばたえぬ我身は白糸のまひくるほどをおもはじとあまたの人の手にすれ身ははし鷹のすゞろにて云々」

（類聚名物考第五册の三八七頁）

物集高見の『日本大辭林』落合直文の『詞の泉』とも、まひのはの條に舞羽の義とし、まひばの條に『まひのはに同じ』といへり

三　未定

大槻文彥の『言海』まひばの條に『まひば　舞羽。或云、マイバにて卷羽（マキバ）の音便と』

まいばの條に『まいば蟠車（マヒバ）の條を見よ』といへり。

まつこう（額の中央）

一　マツカフ

一　谷川士清　まつかふ　抹額也。『本朝式』に末額とも見えたり。もと軍容より出たり。今いふ鉢纏也。よて冑の額上にあたる處をもしかいへり。眞向の義にはあらじ。

（倭訓栞）

二　山岡俊明　眞向　まつかふ。まむかふを略てまつか

うと云ふは音便の轉訛なり。額の正面をいへり。戰記等に「まつかうなしわり」などと見えし是なり。○『參考保元平治物語』「眞向内兜はおそれも候。障子の板か。栴檀弦走か。……」○「眞向御頭の骨はおそれも候」

（類聚名物考第四册の一八八頁）

はやく、槇島昭武の『合類大節用集』卷六の四九丁に『眞向（マツカウ）或作二眞甲一首鎧正面』といへり。

大槻文彦は、『言海』まつかふの條に、『まつかふ　眞向。或は眞甲、眞額。額の中央』と注し、まつかうの條に、『まつかう　抹額。字の音の音便。鉢卷に同じ』と注せり。されば抹額は額の中央をいふまつこうとは何等の關係もなきものとせるなり。

二　マツカウ

新井白石　『合』には「衛士の朝服、會集の日は朱の抹額挂甲を加ふべし」と見えたり。抹額といふものすなはち鉢卷といふものにてあるなり。……冑の額上にあたる所を俗に末都加宇といひて、眞向の字など用ひ來れり。まことは抹額といふことばの冑にもうつりし也。額の字を加宇とよむ事いにしへのならはし也。帽額とかきて毛加宇などもよみたり。

（本朝軍器考故實叢書本一二九頁）

『俚言集覽』まつかうの條にも、『倭訓栞』の説をあげて、『愚按、額字入聲なれどもカウと呼ときの假字はフ文字にあらず。宇の假字也。是等は音便の假字遣ひ也』といへり。

此の他、橘　成員の『倭字古今通例全書』に『まつかう　正面。同訓に眞向はかぶとのことに云』とあり。

三　マツカフ・マツカウ

物集高見の『日本大辭林』まつかうの條に、『まつかう抹額。はちまきしたるひたひのところ』　まつかふの條に、『まつかふ　眞甲・抹額。まつかうを見るべし』とあり。

落合直文の『ことばの泉』の説ほゞ同じ。但しまつかふの條なる注の抹額を削り、眞甲とのみあり。

まとい（團欒）

一　マトヰ

一　藤原清輔　『奥義抄』（歌學文庫一の二八頁）に『まとゐ　圓居なり』と注せり。

顯昭（古今和歌註第一七の一丁）　行阿（假名文字遣三六丁）　四辻善成（河海抄國文注釋全書本三二四頁）　宗碩（藻しほ草卷一六の三九丁）　契沖（和字正濫鈔二の二四丁）　橘　成員（倭字古今通例全書）　平直方（夏山雜談三の三四丁）　賀茂眞淵（神遊考全集第二の一九九三頁）　楫取魚彦（古言梯）　谷川士清（倭訓栞）　山岡俊明（類聚名物考第四册の一七三頁）　本居宣長（古今集遠鏡全集第五の七五〇頁）　加茂季鷹（正誤かなつかひ）　春登（假字音便撮要）　萩原廣道（心の種）　高橋殘夢（國字定源上の三五丁）　近藤眞琴（ことばのその）　大槻文彥（言海）　落合直文（ことばの泉）等みな圓居の義とせり。

二　清水濱臣

まとゐ　纏居（マトヒキ）なるべし。圓居と云説いかゞ。

橘　守部も『神樂入綾』（上の二一丁）に、眞淵が圓居の説をあげて、『是博通の説なれどもかなひがたし。そは宴席に集（ツド）へばとて、必ずしも圓（マト）かにのみ並ぶべきにあらざれば、』『古今昔物語』に纏居（マトヰ）と書たるを正字とす

べし。卽集ひたる人々の纏（マツ）はり居（ル）よし也』といへり。

此の他、石川雅望の『雅言集覽』物集高見の『日本大辭林』等、また〒の假名遣とせり。

二　マトヒ

香川景樹『古今集正義』一の一五七丁「いざけふは春の山べにまじりなんくれなばなげの花のかげかは」の歌の解に、『顯本』『奥義抄』等に、三の句まとひなんとあるぞ正しき。『密勘』に「迷（マト）ひなんをまじりなんに點をあひて可用の由侍し也」とあり。こはまとひなんは統（マト）ひして酒などくまんといふなるを、迷（マト）ふ事と見られたるより、まじりに點じかへられたる也。

マトヒは統フにて一まとひ一むれの事なるを、體言にマトヒスともいひて、思ふどちむれよる事をいひなれたり。「思ふどちまとひせる夜は唐錦」といへるも同じ。是をこの頃圓居の意と思ひあやまちしより、まとひなんと活らきたる用言をば、圓居（マトヰ）の詞しかあつかふべきにあらねば、惑ひなんとこゝろえ、さて惑ひなんとありては意とほらねば直したるもの也。

『うつ穗』に「まとひする千年の陰の嬉しさにもるともなげの松のかげかは」とあるは、さながら此歌によれるにて、初句のまとひするは、卽ち此まとひなんをとれる也。『中務集』に「思ふどちまとひて見れば梅花云々」といへるにも今をしるべし』といへり。

小山田與清の『松屋筆記』國書刊行會本第一の五七頁に『神樂歌の榊に、「佐加幾波乃加乎加久（サカキバノカヲカク）者之美止女久禮波也曾宇治比止曾（ハシミトメクレヤソウヂビトゾ）万止爲世利計留（マトヰセリケル）」とある萬止爲を、今井似閑が『萬葉緯』に納し本には、滿登比（ミトヒ）につくれり。こは必寫誤なるべくおもひをりしに、『中務集』に「おもふどちまとひてをれば梅の花心にくくやふかく見ゆら

ん」とよめる歌あり。このまとひては打纏（ウチマトヒ）との義ときこゆれば爲（ヰ）と書べきにあらず。……比（ヒ）と爲（ヰ）は通音なればかよはして書るなるべし。鷹（タカ）の木居（コヰ）を戀（コヒ）によみかけ、『今昔物語』に底（ソコ）ヒを底井（ソコヰ）とも書たれば、例おほき事と見ゆ」といへるも、景樹と同意の說なり。

義門は『山口栞』（中の四〇丁）に、マトヒの說を破して曰く、『中務集』に「おもふどちまとゐてをれば梅花心にくゝや深く見ゆらん」と見え、『宇都保』吹上に「春ながらとしはくれつゝ萬代を君とまとゐば物もおもはじ」とある。これらは用言にいへる也。此言今は唯躰言にのみいふなれど、もと和行の用言なりしか、又は圓居の文字より出たる詞にて、もとは躰にのみいひしを、まれ〳〵には用にもつかひしものか、そはさだかにはしられねど、むかし人の用言として歌にもよめる證は右の二にて明也。（これにつきて思ふに、ある說に、圓居の字にかゝはるまじき詞なるに、あやまりて圓居の字になづめるから、かなをさへあやまれるなりといひて、或はマ集（ツド）ヒの義とし、或は纏ヒの意の詞ぞととくはみなわろし。もしさる詞ならば、右のうつぼなるうたも「君とまゐとはじ」とこそあるべけれよく考ふべし。）

まとい（團欒）

ある人問、『中務集』の「思ふどち云々」の歌のさまを案ずるに、「圓居（居）てをれば」といへるは重言になりていかゞなり。（「マ集ヒテ居レバ」「纏ヒテ居レバ」といふ事にて、ヰとかけるは後人の誤なりともいはれぬべきこゝちす。）

答、『古今集』に「野べ近く家居（居）しをれば鶯のなくなる聲は朝な〳〵きく」とよめるなども、居といふ事重れるに非ずや。（古今の歌「家ゐしせれば」と一本にあれど、なほ「をれば」とあるかたよろしかるべし。）尚かの『うつぼ』吹上卷に「君とまとゐば」といへるにあはせ考ふべし。（なほいはゞ、假字の必ヰなることは、神樂歌に、「さかきばのかをかぐはしみとめくればやそうぢ人ぞ万止爲世利計留」と、古本にかく爲字かけるにてしるし。ある書に、是を滿登比世利介流としてのせたるは何によれるにや。いとおぼつかなし。）

さて第二音にてヰ居るべき云々」と見えたるにて、中二段の活にはあらとあるのみなれば、一段の活きか、中二段のかと疑はしきやうなれど、一段のなるべきは、家ヰといふ詞、これと同じ活きと聞ゆるを、『萬葉』十二に、「里近く家や

ずとしられたり。『貫之集』にも「山風にかを尋てや梅花匂へるほどに家ゐそめけむ」といへるなどをみるに、家ヰ・マト居などみな用言なること著し。（かの纏ヒの説を誣ひんとては、「いざけふは」の古歌の「まじり」をしも謬なりなども云めるは、皆語の用きのかたに心づかぬから也。）」といへり。

中島廣足も『橿のしづえ』下の二九丁に、義門の説を賛し、なほゐを用言にせる例として、『和泉式部集』「あみのめに風もとまらぬうらにてもあまならなくにながゐつるかな」『同續集』「いづこにかこゝら久しくながゐつる山より月の出ているまで」の歌をあげたり。

まとい（纏）

一　マトヰ

一　寺島良安　まとゐ　軦幟、軦與レ的同字。纏幟。圓居。俗云末止井。

按軦幟始ニ于永祿元龜之比ニ而正字未レ詳ナラ相傳北條氏康家臣同左衛門太夫始作レ之而後武田信玄製ニ大小二品ニ最戰場重器也今諸將作ニ一器ニ懸ニ竿頭ニ令レ持レ之先ニ於衆ニ其器家家有レ所レ定作レ之士卒觀ニ軦居所ニ向隨行猶ニ射的之軦ニ乃是大將標也。

（和漢三才圖會活版本四〇八頁）

二　谷川士清　まとゐ　軍陣のマトヰも的の義なるべし。士卒を率ゐる目あてとする意なれば、纏と書はいかゞ侍らん。馬印と一物なりといへり。

（倭訓栞）

二　マトヒ

山岡俊明　纏　まとひ。『前漢書』七十六、趙廣漢傳幢槩。注

「師古曰、幢麾也。纏有ニ衣之戟。其衣以ニ赤黑繒一爲ニ之」

また新井白石の『本朝軍器考』（故實叢書）に『馬ジル

〔師古曰、幢麾也。纏有ㇾ衣之戟。其衣以ニ赤黑繒一爲ㇾ之〕

はやく槇島昭武の『合類大節用集』（巻七の二三丁）に『纏（マトヒ）兵家所用』と見ゆ。

『俚言集覽』にも『纏。馬印を纏と云。麻止比の假字也。圓居と混同すべからず』といひ『日本社會事彙』（ウマジルシの條）にも『まとひ　俗に纏の字を用ふ。これを諸書にマトヰの假字に書くは誤れり。衆人を纏ひあつむる所の印なれば也』といへり。

物集高見は『日本大辭林』に『まとひ　纏。大將の居る本陣の標（シルシ）にたつるものにて、竿のさきにさまざまのものをつけたり。これはちり〳〵になりたる士卒の、こゝかしこよりみてあつまるやうにするものなり』といひ、落合直文の『詞の泉』また纏の義とせり。

大槻文彦は『言海』に『まとひ　纏。一軍の陣所の標として立つる具。或云的率（マトヰ）の義かと』といへり。

また新井白石の『本朝軍器考』（故實叢書本九頁）に『馬ジルシといふ物は、永祿比ほひ迄はなかりしに、元龜の比ほひより始まれりとも、信長記又は天文の比ほひすでに始まれりともいふ。相模の北條の家人大道寺といふもの、河越の夜軍に、本間といふものをうちて、それが差物を取りておのがしるしとす。是より小マトヒといふ物は始まれりと』『甲陽軍鑑』には見えたり。今の兵家の說に、大馬ジルシ・小馬ジルシ又大マトヒ・小マトヒなどいふ物ある歟。馬ジルシといひマトヒといふ是れ一物にして名を異にす。或人のいひしはマトヒといふことは甲斐の武田の家のことばなりとぞ』といへり。

みずわぐむ

一　ミヅワグム

一　素寂　みづわくみて侍るなり。『後撰集』「年ふればわが黒かみもしら川のみつわくむまで成にける哉」としたけぬればこしかゞまりて、兩のひざとりいでたる中に頭まじはりぬれば、三の輪をくみ入たるがごとし。それによりて三輪組と云。

（紫明抄内閣本、天の三六丁）

行阿の『假名文字遣』四〇丁にも『白川のみつわくむまで　三輪組』と注し、この他、古き抄物類多くこの説を採れり。藤原爲家の『後撰集正義』續羣書類從卷四五四の五六丁にも「或老人云」として此説を引用せり。

但し同じ『後撰集正義』に引ける或人の説にはこれを駁して『此儀いさゝか不審なり。老かゞまりたればとて三の輪あるべしや。この詞あしく心得て今案によめるにや』といひ、なほ一の傳説をあげて曰く、

『滿態（ミツワザ）スといふ詞あり。これも老人のことより出來たるなり。老子傳云昔何（レン）國哉、一人の老翁に二人の男子あり。兄弟はたちにたらず、父九十餘。老たることをかなしびて、二人の子に云、汝等ねがはくは、吾年の老たる事を天に祈て、今一度わかくなすべしと懇切に申。二人無レ貳以二至孝之志一祈（テ）レ天經二數日一。夢に一人の童子來示云、汝が家の面に大河あり。彼河の南に萬仭の淵あり。かの淵をはやく埋て、其上に構レ壇（チ）燒レ香備レ花可二祈請一。然者汝等父、立に可レ還二壯年者一云々。二人の子一夜一同に此夢を見て大に悅びて、行二向（テ）彼淵一見二其體一更非可及力。雖然漸々埋之不レ經二幾年月一。廿日といふばかりに此淵を埋つ。祈請之趣如二夢之所一見。然而三七日終て其朝に父を見るに、白髮忽に黑く容貌廿ばかりと見ゆ。一父心二子悅びいふにたへず。于時父悅云、汝等之運レ土埋（ミツワザ）レ淵滿態してのゆへに、今みつわ

ざするほどになれりと云なりとぞ傳をしへはべりし』といへり。

二　伴　信友

みづわくむといふ詞のふるき書に見えたるは、檜垣嫗の歌なるぞ始なるべき。其は清輔朝臣の『袋草紙』に、肥後國遊君檜垣老後落魄者也。『家集』云おいにきはまりて（此おいに云々の詞、袋草紙普通本に脱たるを、一本によりて取れり。このほかにも、本どもに互に寫誤あり。又この文を後撰集正義に清輔卿記に云とて引れたるにも、またいさゝか異なる處あり。これかれ挍べて、其よしとおもはるゝかたに據りて訂して引り。）すみ所もなくなりて、手づから水くむほどになりて、桶ひささげて出るにしも、國のかみ神拜に出給ふ道にさしあひたれば、めざとなるもの見つけて、いかでかかくはと見とがむれば、かみ何ぞと問ければ、名高き檜垣なりと人の云けるをきゝてよびいづれば、はづかしけれどかくれ所もなきに思ひ佗て、桶さしおきてゐれば、いかでなどかくは成しぞとあるに「老はてゝかしらの髪も白川のみづはくむまでなりにけるかな」白河は件の所にある河の名なり。如二後撰一大貳興範にあひて詠と云々。と見えたり。

『後撰集』雜三には　つくしの白川といふ所に住侍りける、に、まへより大貳藤原興範朝臣のまかりわたりたるついでに、水たべんとてうちよりてこひ侍りければ、水をもて出てよみ侍りける。ひがきの嫗「年ふればわが黒髪も白川のみづはくむまでなりにけるかな」として載られたり。（五の句、普通本には「老にけるかな」とあれど、今は正義に擧られたるに據れり。……）

さて此みづわくむをみづわさすともいひて同言なり。言の意は、『後撰集正義』に諸説を擧られたる中に、「或老人云みづわぐむと云事、老人のかゞまり居るかたちなり。左右の膝立てやとしたる貌なり。まさに三輪ありとみゆ」と載られたるのみぞかなひたりげにきこゆれどなほきこえ難き處あるを、その老人の説に據りてつらつら考ふるに、ミツワグムは三勾（ミツワ）グムの義にて、そは老に極りて、腰の二重に勾（カヾ）まりたるが上に、膝もまた折れ勾みたる容貌をミツワと

いへるなるべし。ワとは打まかせては圓きものを云ふ言ながら、轉りては物を二にも三にも勾めたるをもいふべし。

『夫木抄』に載たる源仲正朝臣の歌に「かまどもるみつわのおみないほりよりはひいでの小田に早苗とる見よ」老勾まりて、歩行もしがたき嫗によみかけたる趣なり。……とたゞにミツワとよまれたるをもおもふべし。

『古事記』に倭建命の御言に、「吾足如三重勾而甚疲」とあるも、御足の腫れたるを譬へ給へるにて、體狀はことなれど、三重としも詔へるに此の三勾と云へるおもむきのおのづから似通ひてきこゆ。

さて腰の二重になるとは、今の世にもいふ言にて、『夫木抄』の歌に、「おいらくの腰二重なる身なれども卯杖をつきて若菜をぞつむ」『大鏡』に「此姨いとといたう老てふたへにてゐたり」なども見えたり。然二重といへるなどにつけても、身體の三に折れかゞみたる形容を三勾と云けむ事おもひ合すべし。此頃下總の佐倉わたりの民の老たるが、ものがたりせる言の中に、「おのれ年老たれどいまだ足腰の三に折るゝばかりにもあらず」といへり。これいにしへの言のさまの殘れるにて、三勾ぐむの言の意とおなじ。

さてミツワクム（ミツワクミ）とは、しか三勾になれるを、さし交たるごとき狀に甚じく云へる詞なるべし。又ミツワサス又ミツワサシと云ふは、サスは氣ザシ・根ザシなどいふサシとおほかた同じ意にて、殆ミツワともいふべくなりたる形容をいへるなるべし。ミツワクムは既にしか成極まりたるうへの形容をいへるなり。檜垣嫗が家集に「おいにきはまりて云々」と云ひて歌にミツワクムとよめるをもおもふべし。

『鴨長明抄』に道因法師が事を「九十ばかりになりて、耳などもおぼろなりけるにや、會の時はことさら講師の座のきはにわけ寄りて、わきもとにつとそひ居て、みつわさせるすがたに耳をかたぶけつゝ、他事なくきゝけるけしきなど等閑の事とは見えざりき」又『續世繼』の序の文に、「みつわさしたる女の杖にかゝりたるが、云々。もとは都にもゝとせあまり侍りて、そのの ち山城の狛のわたりに、いそぢばかり侍りき」などいへる形容をおもひやりてかむがへ

合すべし。

さて此言を漢字に當たるは、『類聚名義抄』古本、仁治二年に寫せる本を建長三年に寫したる。支離をミヅ禾サ爪と訓めり。此字訓、色葉字類抄にも載たり。又顯昭法橋の散木奇歌集の注に、ミツワクム・ミツワサスともに支離とかけりといへり。大江匡房卿の『續本朝往生傳』に「沙門增賀云々兼詠和歌曰水輪指矢曾千餘之老乃波久良希之骨爾逢爾介留哉」とあるを、『印本』に「支離八十有餘之老乃波海月之骨爾逢爾計留鉋」と作き、尾張國眞福寺に藏る建長五年の『古寫本』には二樣ともに並載たり。『多武峯略記』跋に建久八年歳次丁巳閏六月十二日於二多武峯南院一檢校靜胤撰レ之に載たる增賀上人傳にも「長保五年六月八日未時詠二和歌一曰支離八十餘之老乃浪海月之骨爾逢仁計流鉋」と書せり。件の歌にもミツワサスに支離を當て書るなり。然るに『古本今昔物語集』にも此歌を載て「美豆波左須夜曾知阿末利乃於比乃奈美久良介乃保禰爾阿布曾宇禮志伎」と書り。美豆波と書るは記者の疎なりしなり。近き頃、或人件の今昔物語集の歌の書ざまに據りて、美豆波といふを正しとして解る說あれど、本書三句に老を於比と書るも假字違へるを、ひそかに於以と書直しおきて、美豆波と書る方をのみとらへて、證とせるはいかゞなるうへに、其解說もはやく谷川士淸の和訓栞にいへる兒齒の說にもはら同じくてさらに諾がたし。○編者いふ、小山田與淸は松屋筆記（國書刊行會本第二の一八一頁）に、「ミヅワサスと書たるは、走を波志流・和志流などいふ類にて、通音なれば事もなけれどなほ美豆波左須と書べし」といへり。かくて支離の字は、漢籍『莊子』に見えて、注に「身體無二收拾一之貌」と云へり。この字義をおほよそに心得て、ミヅワサスと云ふ言に譯せるなり。これをも合せ考て言の義の證とすべき也。

今考たるごとく、三勾の義ならむには、ミツワとツを淸音にこそ唱ふべけれ。ミヅワといへるにはかなひ難しといひおもふ人もあるべけれど、此言、かの檜垣嫗がよめる歌詞を始にて、それより後の歌どもにも、おほくは水にいひかけたるは、古はもはら水をミツと淸みて云へりしなるべし。然考たる由は、今もその肥後の水島を、其島人はさらにて、其わたりの士人も、なべて彌都島と淸音にいひ、その所のほかにも、又他の筑紫の國々の中にも、水を淸みていふ所あり

と、肥後の熊本人木原楯臣いへり。古言の遺れるなるべし。

然るは『古事記』に彌都波能賣神（ミツハノメ）『神代紀』に罔象の訓注瀰茫破迺迷（ミツハノメ）とみえたるは、水神の御名なれば、彌都・瀰茫など書るは、決て水の義なるべきに、然清音の字を用ひられたるをもて證とすべく、又『伊勢家集』の首に、伊勢に男の文をおこせたりけるに、返事せざりける由をいへるところに、「こゝらの年月になりぬれど、などか見つとだにのたまはぬと云ひければ、たゞ見つとのみぞいひたりける。それより此女をミツとぞつけたりける」といひ、また男のかけ歌に「夏の日のもゆる思ひのわびしさに水乞鳥のねをのみぞなく」返し「いたづらにたまる涙のみつならばこれして消てといはましものを」とよめるかけ歌の水乞鳥は、女をミツと名づけたるによりて、ミツ戀鳥といふにかけ、返しの「たまる涙のみつならば」のみつも、水にミツを兼たる也。但し後世の歌詞の云ひかけには、清濁にかゝはらずしてよめる例も、まれ〳〵にはあれど、件のミツコヒ鳥を女の名のミツにかけて、ミヅコヒ鳥とよみてはあまりに口つゞにてつきなきが上に、返しに「たまる涙のみつならば」とよめるも、水にミツを兼て應へたるにて、其意とほりてきこゆるを、たゞ涙の水とのみするときは、いと拙劣くなりてきこえ難きはた思ひ合すべし。萬葉集には、水といふに美都とも美豆とも二かたに書り。此集は清濁定ならぬ書ざまも交れゝば證としがたし。故雅（レ）しくは美都和佐須（ミツワサス）と都（ツ）を清て唱ふべし。上に引たる如く、類聚名義抄にミヅ禾サ爪と、ツに濁聲の點をさしたるは、そのかみ既に今世の如くなべてミヅと云ひならへるかたに依れるものなるべし。

（比古婆衣存採叢書本六の二七頁）

三　本居大平

みづわくむは老人の腰の屈（カヾ）む事をいふなりといふ舊說然るべし。

それに付てみづわぐむといふ詞の腰のかゞむ事といふはいかにといふに、上代の井の水をくむさま、先づ深き井の水は、桶の如き檜曲物（ヒワゲモノ）に綱をつけて釣揚て汲しなるべし。是

ツルベと云器なり。又淺き山の井又川水などを汲むも、歌などに見えたるが如く、ひさご以て汲しなるべし。右二つのさまなるべし。今の代のごとく棹ツルベ・車ツルベはなかりしなるべし。依て水をくむさまを「水輪を吸」といひしなるべし。

ミヅワ・ミヅハ、假字はしれがたけれど、しばらくワの假字とさだめて、水輪（ミヅワ）といふは器の事とすべし。

さて水輪と云は水を入る器の名にて、それをたゞに水の事とするなり。水を入る器の名を云てたゞに水の事とする例は、飲む事に用ふる水をミモヒといふが如し。催馬樂のあすかゐの歌「あすかゐにやどりはすべしかげもよしみもひもさむしみま草もよし」又主水の官をモヒトリといふも同じ。モヒは水を入る器の名なるを、のむ用にする水をミモヒと云なり。依てミヅワクムといふは、水を入る器を用ひて、井の水を斟揚（クミアグ）る事なり。そのさまは腰のかゞむなる事上にいへるがごとし。

さて老人の腰の屈むを名づけて、水ワクムとはいふなるべし。

さてこゝに檜垣が歌によめるは、水を入る器の名の事にもあらず。又水を汲む形を水ワクムといふによりていへるにもあらず。こゝにてはたゞ老人の腰の屈む事をミヅワクムといひならはしたる詞につきてよめるなり。其時は決て水を汲むといふ語にはかゝはる事にあらず。白川のと枕言のやうにいへるは、ミヅワのミツの詞にかけて面白く思ひよりて、一つの趣向にあたらしくよめるなり。

（後撰集新抄別記二〇丁）

四　大石千引

支離（ミツワクム）　身痩（ミツレワク、ム）　回屈

（言元梯）

五　谷千生

みつわくむは身撓（ミタワ）クムと云事也。ツとタと通音なり。但身撓屈（ミタワクヾム）の略とすれば聞えやすきやうなれど

わろし。クムはたゞ添たる詞なり。故サスともいへるなり。

クム・サスは先達いへるが如同じ詞にて、しかなるさまをいふ詞也。たとへば草木などの芽の出るをメグムともメザスともいへるが如し。（タワムもタワと云がことばのもとにて、タワワなどいへるこれなり。ムははたらき詞をそへたるなり。）

さて『言元梯』をみれば、支離（ミツハクム）は身瘦回屈（ミツレワクム）也とありて、己が考とおほかた同じやうなるはいとうれし。されど瘦回屈（ツカレワグム）なりといへる、もの遠きこゝちす。されば近時の歌書どもすりまきなる、うつし傳へなる、おほかたみづわくむと云ことばをワの假字にかきたり。これふるき假字のおのづからつたはれるなるべし。……かの『古本今昔物語』にありといふなる「美豆波左須夜曾知阿末利乃於以乃奈美久良介乃保禰爾阿布曾宇禮志伎」といふ歌のみを據とはしがたし。かの書もしは涴（ワ）などのあやまりにはあらじか。

（語格雜論三の一一丁）

契沖の『源註拾遺』國文注釋全書本二七頁本居宣長の『御國詞活用抄』第五會鈴木朖の『雅語譯解』本居春庭の『詞の八衢』全集本三五頁等、ワの假名遣とせり。

二　ミヅハグム

みづはぐみて　支離　『日本紀』曰「水神罔象女。罔象此云美都波」　伊弉諾尊所生神也。髮白已老嫗體也と云へり。（編者いふ、一説として三輪組の説をも載せたり。）

（河海抄國文注釋全書本六七頁）

一　四辻善成

契沖の『源註拾遺』國文注釋全書本二七頁に、『今案、罔象此云ニ美都波（ト）ミヅワグムと假字ことなり。またクムの詞そへり。ミヅワグムを又ミヅワサスとも云り。『日本紀』を引説は誤りなり』といへり。

二　荷田春滿　賀茂眞淵の贊同

『縣居雜錄』全集第四の四〇六三頁に『み

本田日神

づはさす　『今昔物語』舊本第十二增賀といふ僧の事をいふ條云、「亦往生極樂に寄て和歌を令讀。聖人も自ら和歌をよみて云、美豆岐左須夜曾知阿末利乃於以乃奈美久良介乃保禰爾阿布曾宇禮志岐」と。此美豆岐の岐は波の誤とみゆ。『後撰』に「みつはぐむまで」といふをあしく心えて、三輪と書て、老て腰のかゞまりたる事なりと皆おもへり。いかで腰のかゞまりたるが三つ輪をくむやうなるにや。ことわりなき事なり。

我師春滿のいはれたるは、三齒組を水者汲といひかけたるにて、其老女の水くみてゐたるにいひかけたるも聞え侍り。且老ては齒のところ〴〵ぬけ落て、上下の齒をくみあはせたる樣にさし入ものなればいふとなり。是まことにしかなり。右の「美豆波さす」といふはその心なり』といへり。（源氏物語新釋（全集第五の四五七八頁）にも同じ說を注せり。）

山岡俊明も『類聚名物考』（第四册の二〇九頁）に三齒交の義とみずわぐむ

し、『歌に水をくむと云ひかけたれば、ミヅハの者はてにはにして輪とはかよはず。三輪組なれば、輪はたしかなるワの意なれば、てにはのハとはかよふべからず。よてその意とけがたし。是は老て上下の齒のまばらに落て入組交りて有るをいふ。『史記』『漢書』などに見えし、地堺の互に入合たる所を犬牙相交としるせしも、犬の齒の上下入交りたるが如なるにたとふるなり。古詩に「口含二兩齒一」など見えしは、またく此さまをいふなり』と說けり。

清水濱臣は『答問雜稿』（二の四丁）に『賀茂眞淵の說に三齒組なりといはれしもいとしひたる說也。假字のいひかけはかなへれども齒の組あふに三とかぎれることあらむや』といひ、

萩原廣道も『源氏物語語釋』（一の二九丁）に『みづはぐむといふ語の意は詳ならず。『新釋』に『今昔物語』を引

れたるにて、ミヅハサスといへるも同じ意とは聞えたり。然れども三齒くむとていはれたる說はかなへりとも聞えず。齒の落たればとて、必三ッさしあひくみあふ物にもあらざればいかゞなるに、クムといひ、サスといへる意も、かの說のごとくにては聞えがたし』といへり。

三　谷川士清　みづはぐむ　老人の體をいへり。按ずるに、『詩』の注に、「兒齒老人齒落更生」と見えたり。瑞齒別天皇の御名によれば、兒齒は長壽の相なれば瑞齒といふべし。グムはメグムといふが如し。

或は三齒組にて僅かに殘れるをいふとし、或はミヅワクムにて三輪組の意とす。よて『莊子』の支離をよめり。されど『後撰集』の詞書に「水たべんとて打よりてこひければ」と見えたれば、三輪にはあらじ。

（倭訓栞）

村田春海も『假字拾要』に『稚齒（ミヅハ）にて老たる人の又小兒の如きはの生るを云ならむか』といひ、

清水濱臣の『答問雜稿』（二の四丁）にも、『近來季吟などにいたるまで皆三輪組の說を信用せれども、もしまこと三輪組の意ならば、いかで水者汲とはいひかくべき。天曆の頃までは、後世の歌のやうに、みだりに假字のたがひたるいひかけはなかりし也。『古本今昔』に美豆波とあるにてもしるべし……ミヅハは『毛詩』『爾雅』等に見えたる齯齒にして（毛詩魯頌閟宮篇云、黃髮兒齒。鄭箋云、兒亦壽徵。爾雅釋詁云、黃髮齯齒、鮐背耇老壽也。郭璞註云、齯齒、々墮更生細者。說文云、齯、老人齒。五鷄切。）今もまゝ六七十ばかりの老人などの、上下の齒皆落たるあとにさらにちひさき齒のほそくはゆることある也。そは壽祥なれば、瑞穗國・瑞籬・瑞殿・瑞柏などの例にて、ほめていふにて、瑞齒とはいふなるべし。常に異なる齒を瑞齒といへる事は、反正天皇の御諱を、瑞齒別と申奉りしも、常の齒と

はことにしてめづらしき御歯なりしより名づけ奉りし也。（日本書紀云、瑞歯別天皇（中略）生而歯如一骨。古事記云、水歯別命（中略）御歯長一寸廣二分上下等齊既如貫珠。（水歯は借字なり））

みづはぐむともみづはさすともいふは、クムは含にて、草木の芽含（メクム）を、たゞクムとのみもいひて、ツノグムアシなど歌にも常によむ。此心におなじ。サスは萠（キザス）にて、ミヅ枝サス・若葉サスなど、歌にも常によむ。此心におなじ。さればクムもサスも、みづはのはえかゝるさまをいふ也。みづはぐむ・みづはさすともにかならず齔歯のはえたるをいふのみにはあらず。齔歯も生ぬべきまで老たりといふ心にて惣て老人の事にいへるなり」

といへり。また、

橘守部も『難語考』（二の一四丁）に、『此は若歯組（ミヅハグハ）の義にて侍るなり。若歯とは、長壽の人は一たび歯のぬけ盡て後、又再び若々（ミヅ〳〵）しき歯の生出（ヒヅ）と申て、漢籍にいはゆる齔歯の事にてはべり。『爾雅釋詁』に「黄髮齔歯（ハ）壽也」とありて、註云、「齔歯（ハ）歯墮（テニ）更生（ニ）細（ナルチ）者（ニ）」といひ、又『劉熙釋名』に「齔（ハ）大歯落盡（テニ）更生（ニ）細（ナルチ）者（ニ）如（ニ）小兒（ニ）歯也」と見ゆ。されば若枝（ミヅエ）・瑞玉（ミヅダマ）などの若にて、若くみづ〳〵しき意。クムは葦の角ぐむ・芽（メ）ぐむなどの組（クム）にて侍るなり』と說けり。

小山田與清（松屋筆記國書刊行會本第一の四九七頁第二の一七六頁）も、谷川士清の說を千古の確論也と稱揚し。『みづ歯さすも兒歯の指出（サシイヅ）るにて、指（サス）は、枝の指・氣色の指などいふにおなじ』といひ、『かいわぐむといふ語は、（編者いふ、宇都保物語藏開に、「頭中將の朝臣は、したのはかまをきて、みなかいわぐみてはしらるめりし」宇治拾遺（一二の一四丁）に、「うすいろの衣の、いみじうかうばしきをとらせたりければ、二ながらとりて、かいわぐみて、わきにはさみてたちさりぬ」などあり。又空穗物語藏開に、「此女前なる硯に手習をして、……おしわぐみておいたる」同書あで宮に、「文をちひさくおしわぐみて」などいふ語もあり。）カイは打（ウチ）也。ワグムは輪（ワグム）組也。後に三輪（ミツワ）組（クム）は老人の貌（サマ）といへる說によりて出來たる詞也』といへり。

また井上文雄の『冠注大和物語』（中の六五丁）にも『歯の

みずわぐむ

一たびおちてまたはゆるをいへりといふ説やよろしからん。……わが父の友市川氏、六十にあまりて、こまかき齒さらに生じたるをまさしくみつれば也』といへり。

中島廣足（橿園隨筆下の三八丁）　村上忠順（雅語譯解拾遺）　佐藤誠實（語學指南三の一三丁）　近藤眞琴（ことばのその）　大槻文彥（言海）　物集高見（日本大辭林）　落合直文（詞の泉）等また齵齒の義とせり。

四　黑川眞頼　『後撰集』雜三に「年ふればわが黑髪もしら川のみづはくむまで老いにけるかな」とある歌にて、ミヅワクムにはあらざること瞭然たり。然るは水は汲むといひかけたるを見るべし。此は詠歎にて、水汲むといふに同じ。かゝるところの詠歎にはを用ゐるが定例なれば なり。さてみづはくむとは身偃（ミツハクム）にて、年老いて身のつばくむなり。ツバクムはツヾマリカガム狀をいふ。顯昭いふ、「みつはくむとは老いぬるをいふなり。支離とかけり」といへり。亦徵とすべし。支離はマガルことなり。

（黑川眞頼全集第六の一五六頁）

此の他、石川雅望も『雅言集覽』にハの假名を書せり。なほ『源注餘滴』國書刊行會本一〇三頁には山岡俊明・清水濱臣等の説と同じく『後撰集』をひきて、『水をくむといふにかけていひたる詞なればワと書べきことわりなし』といへり。

參考

一『俚言集覽』愚案の説にいはく、『無明抄』「九十ばかりになりて、耳なども朧なりけるにや。會の時は殊更講師の座の際に分よりて、脇許につとそひ居て、三はせる姿に耳傾けつゝ、他事なく聞けるけしきなど云々」三はせる姿とあれば、三齒とも瑞齒とも思はれず。されば三輪には猶なるべからず』

二　有住　齊の説『如蘭社話』巻の一四に見えたり。諸説區々なる中に齶齒の説を採り、『されど『源氏』夕顔の巻に「みづはぐみて侍るなり」とあるは、玄旨法印の説に、「年よりぬれば、腰かゞまり脊くゝまり、二の膝とがり出たる中に、頭まじりて、三ッの輪を組たる如くなり」と説れたる如く、紫式部も心得て書たるならん。さればみづわぐみてと書たるなり。尤『湖月抄』は假字の調なくみだらなれば信じがたけれど、「みづはめぐみて侍るなり」と云語勢ならず。只年よりて三ッ輪をくみたる如く老屈せしものなりといへる意なれば、檜垣嫗の本歌をとりし文にはあらで、當時俚諺にかゝることをいひしまゝの文にして、此本歌を引出て評するは、あまりあなぐり過たりとやいはん』といへり。

むこう（向）

すもう（相撲）やもう（病）の條參照

大槻文彦の『言海』に『むかふ　向。むかひの誤。むかふの山・むかふの家・むかふ河岸』と注し、物集高見は『日本大辭林』に『むかう　向。むかひ。おもてのかた』　落合直文は『ことばの泉』に『むかう向。むかひの音便』といへり。

『古事記傳』本居宣長全集第一の六八一頁　白日神の注に、『白字は向の誤にて牟加比なるべし。其故は『式』に山城國乙訓郡向神社、大歳神社と並載れり。此向神社は大年神御子向日神を祀ると云。何の説も同じければなり。……今向日明神と申し、其處を向日町といふ。今は牟加布と唱ふれども、古は牟加比なりしこと、日字を添て書くにても知るべし。中務内侍が日記に「むかひの明神近きほどにて、常に參ると云しが、思ひ出るよりあはれになつかしくて、「なつかしむ心をしらばゆくさきにむかひの神のいかが見るらむ」とあり。其頃までも牟加比と唱へしなり。其内侍は弘安正應のころの人なり。』といへり。參考の爲に抄錄せり。

めんどう（面倒）

一　メンダウ

一　谷川士清　めんだう　面當なるべし。『盛衰記』に「上ろうなりともちぎりは人によるべからず。たとへ下ろうなりともむすめが見するめんだうなり」と見えたり。又メンドヒともいふめれば目厭ヒの義なるにや。（倭訓栞）

二　『俚言集覽』愚按　目たるの條に、『倭訓栞』『メタルガホ』といへり。今も「メダルを見る」『平家物語』に『メタルを見る』といふ目垂の義なるべし』愚按、俗に面倒といふは、目タルの轉語歟。「面倒を見る」といふ語もあり。タルはタルイ也。タユイと同じ言なるべし。ルとユと通ず。太部のタルイの條に詳にせり。（編者いふ、たるしの條に、「たるしカイタルシなど云。タユシと同じ言歟。ルとユと通ず。イハルヽをイハユル、射ルを射ユと云類也。タユは垂の義なるべし」とあり。）

三　大槻文彦　めんだう　面倒。面倒（オモフセ）の當字の音讀か。或云、メンドイと形容詞にもいふ目厭（メイトヒ）の訛か。又は目遠（メドホ）クの音便訛ともいふ。（言海）

二　メンドウ

平直方　めんどうなることと云諺は著（メド）といふことにや。田舍にて著をメンドウと云。筮をとるに、三反して一爻をなし、十八反して卦をなすなり。其仕樣の因循なればメンドウなることといふ俗言の出たるなるべし。（夏山雜談三の二四丁）

本田日神

◉ 參考

新井白石の『白石先生紳書』全集第五の六四三頁に『メンドウナと云は『平家物語』の天とうなの義と同じく日を費すの義歟。編者いふ、天とうなといふ語平家物語に見當らぬやうなり。矢たふなといふ語は、他の戰記にも見えたり。但し「日を費す」といふ意義の語にはあらず。ムダと云もダフナの轉語なるべし』といへり。

も

もじえる(捫)

一 モヂフ

谷川士清 『倭訓栞』に『もぢふ、『神代紀』に捫字をよめり。俗にモヂ〳〵として居などいふ是なり』

『俚言集覽』は士清の說を引き、物集高見(日本大辭林)またハ行下二段活用の語となし、モヂフの假名遣とせり。

二 モヂユ

石川雅望 『雅言集覽』に『もぢゆ 捫。『書紀』一書、永爲汝俳優者云々初潮漬レ足時則爲ニ足占一云々至レ腰時則捫(モヂユ)レ腰』

三 モヂフ・モヂユ

大槻文彥の『言海』もぢふの條に、『もぢふ 捫(モヂ)ゆの條を見よ』 もぢゆの條に、『もぢゆ 捫。又モヂフ・モヂル・ヨヂル。『神代紀』學ニ其溺苦之狀一初潮漬レ足則云々。至レ股則走廻。至レ腰則捫(モヂユ)レ腰(チ)』

落合直文は『ことばの泉』に『もぢゆ 捫。モヂフにおなじ』『もぢふ 捫。ヨヂル・モヂル・子ヂル』と注せ

り。

もだえる（悶）

一　モダユ

一　大石千引　　悶（モダエ）　身撓（モダユ）

（言元梯）

二　小山田與清　　もだえ

『俊頼散木集』八の巻戀下に、片戀の心を「はなぐとやさだつ妹はこひもせでつたなきせなぞ泣もだえける」

按に此「なきもだえける」を諸本「なきも絶ける」と書けり。一本に「なきもゝへける」又一本に「なくもたへなる」なども書たれど、泣悶（ナキモダエル）事と聞ゆ。

モダユといふ詞は、於比由（オビユ）などの語勢におなじくて、於比由（ユ）は喉音の於聲（オゴエ）を出し、於良夫（オラブ）さま也。由（ユ）は由流（ユル）とも活（ハタラキ）て動搖（ユリウゴク）さま也。されば喉音の奥まりたる聲を發出（ハナチ）さんとすれば、體もゆりうごくより於比由（オビユ）とも於比由流（オビユル）とも於比江（オビエ）といへる也。毛太由（モダユ）は聲を出さず默止（モダ）して動震（ユリフルヘクルシム）苦さまなれば、毛太由流（モダユル）・毛太江（モダエ）などいへり。

『頼政集』に、「逐」夜增戀の心を「日をへつゝそふるつらさを重荷にてもだへはつべき心ちこそすれ」　此歌のモダへは悶（モダエ）を持堪（モタヘ）によせたり。かくては假名も毛多閉（モタヘ）と書べくおもはるれど、後の歌なれば假名の證に用がたく、又椎（シヒ）を四位、老（オイ）を生（オヒ）など通音もてよみかくること常なれば、それになづむべからず。

さて此詞の所見は『空穗物語』ただこそ（廿四丁ウ）に、「おとゞおどろきもだえ給ひておもほすことかぎりなし。云云」『落窪物語』二の巻（下の九丁ウ）に「いかで是にむくいせんともだえ給へば云々」『撰集抄』五の巻（宇佐宮事の條）に「涙をこぼして

もだえしかば云々」『發心集』四の巻七丁ウに「おどろきまどひ、おびただしく手をたゝきて、まなこをいからして、もだえまどひてたえいりぬ云々」『砂石集』四の上巻三丁ウに「或入道餅ヲ好ム醫師ナル故ニ、請ジテ主、餅ヲセサスルニ、カノ音ヲ聞テ始ハ小音ニオオヽト云ホドニ、次第ニ高クオヽオヽト、鞠ナド乞ヤウニオメキテ、ハテハ疊ノヘリニ抓ミツキテ、入道ガキカヌ處ニテコソシ候ベケレ。カノツク音ヲ聞候ヘバタヘガタク候トテモダエコガレケリ。此事ハカノ主ノ物語也云々」『地藏靈驗記』六の巻廿一丁オに「イカバセントモダエッヽ云々」『參考保元物語』三の巻廿一丁ウに「聲ヲ惜マズフシマロビ悶ケリ云々」又廿三丁オ「空シキ骸ヲ抱キ悶ケルガ云々」『參考平治物語』二の巻卅八丁ウに「起ヌ伏ヌ歎テモダエ焦レ給ヘバ云々」また『源平盛衰記』四十五丁オ五廿四丁ウ九廿六丁オ十八廿一丁オ十九七丁オ卅一十二丁オ四十六廿五丁ウ四十七十二丁オ『平家物語』二十八丁ウ『長門本平家物語』三十三丁オ・同ウ・十五丁オ・六十五丁ウ五十四丁ウ十六百十六丁オ十七五十九丁ウ十八廿一丁オ『曾我物語』一五十一丁オ十十九丁オ『參考太平記』十六百廿五丁ウ廿一七十五丁ウなど此外いとおほかれど、くだくだしければ引出ず。

（松屋筆記國書刊行會本第二の七四頁）

三『俚言集覽』　もだえ　假字未詳。悶・煩悶を訓り。タエ悶絶の絶の義ならば多曳の假字。耶行の活用也。滿をモチと訓めば滿絶の義歟。

四　寺田長興　もだえ　悶を訓り。揉絶の義か。常に悶絶と云もしるべし。

（太津可豆衛）

五　甫喜山景雄　もだえ　滿悶をよめり。『空穗』忠こそ巻に「おとゞおどろきもだえ給ひて云々」詞には出さで底には絶も入んばかりにいきどほるをいひて、默絶（モダタエ）の義なるべし。悶絶といふもやがて此心なるべく覺ゆ。

（落窪物語證解國文注釋全書本七五〇頁）

もだえる（悶）

六　大槻文彦　もだゆ、悶。默(モダ)して艱む意か。（言海）

この他、村田春海の『假字拾要』に、『もだえ』『うつ保物語』にみゆ。證詳ならねど、モダユといひてモダフといはざれば、かならずエの假字なり』といへり。

橘成員の『倭字古今通例全書』に『もだへ（今按に、もだえ）』と注し、本居宣長の『御國詞活用抄』（第一三會）石川雅望の『雅言集覽』萩原廣道の『心の種』笹村良昌の『假字の栞』等、ヤ行下二段活用の語とせり。

二　モダフ

谷川士清　もだへる　滿悶をいふ。みち湛へるといふにや。身もだへなども見えたり。○俗に手重き事を、モダック・モダ〳〵スルなどいふも、滿悶の意にや。一説に、梵語の母陀羅を結ぶ印手也といへる、是なるべしといへり。

近藤眞琴の『ことばのその』物集高見の『日本大辭林』落合直文の『ことばの泉』ともにハ行下二段活用の語とせり。

もちいる(用)

一　モチフ（ハ行上二段活）

一　本居宣長　用の假字は『源仲正家集』に、元日戀、「千代までも影をならべて逢見むと祝ふ鏡の用ひざらめや」夫木集卅二に載れり。又後なれど、藤原經衡家集にも、此同シ人宇治殿にて、餅をおこすとて、「肴には何もあれども此中に心につかば是を用ひよ」かへし「君が代を心用ひのうれしきはいかなる人のなさけなるらむ」と餅に云かへたるに依て定めつ。仲正は、『後撰集』の作者なればいまだ、假字の亂れざりしほどなり。もちひ・もちふ・もちふると活用く言にて、戀・強

などと同格の活(ハタラ)きなり。

（古事記傳全集第一ノ九五七頁）

二　岡本保孝

假字みだれたる世に、木居(コヰ)に戀(コヒ)をよせ、莞(オホヰ)に覆(オホヒ)をかね、また藍(アヰ)に逢(アヒ)を秀句にするみな誤也。これはいづれも、古書に正しき證ある詞どもなれば論もなし。

用を餅飯にいひなしたるなどは、古書に餅飯の方のみみえて、用の假字はあらねど、餅飯にいひかけたるをみれば、そのころ用の假字、波行の活にこそとおもはるれば、本居氏の說・春海大人の論(わかゝづら)うごくまじきを、或人は、そのころ假字みだれたる世にて、飯をイヰといひけむ、されば飯によせたる也といふ、うらうへの見識なり。その證とて引たる、眞字書のなきはもとよりにて、秀句のいひかけもなし。たゞモチヰル・モチヰレバなどとかきてある書ども也。（その中にモチヰレバとある方はうたがはし。○編者いふ、散木奇歌集に「ほうしごの稻と見しまにもちゐればみそうづまでもなりにけるかな」とある俊頼の歌をさせるなり。下なる「もちゐると物にみえたる例」とある條下を參照すべし。）是は證にならず。物よく心得ざる人のかけるものは、かゝる詞、書きひがむる常也。……飯の假字、後世イヰと一定せざるあかしをいはむ。

『二人丸秘抄』第六　こはいひ　强飯　もちひて　用・庸

『同』第七　いひかしぐ　飯炊

『同』第八　あさかれゐ　朝炊　もちゐ　餅

かれゐひ　餉　もちゐる　用・庸

『類字假字遣』　いひつぶ　飯粒　いひかしぐ　飯炊

『二人丸秘』

もちひて　もちいらる共　用・庸『二人丸秘』

もちい　もちゐ共　餅『二人丸秘』

これみるべし。その法則とすべき書、かくのごとくしどけなく、前後打合はざることのみなり。たとへ後世一定して、イヰとありても證にはならねど、まして後世二方なるをや。假字みだれたる世は、又そのみだれたる所によりて、お

もちいる（用）

のづからさだめもあるものにて、俊頼などもそのよのさだめによりて、餅をモチヰとさだめてよめるなりといふ人もあれど、みな識見の紙背に透らぬよりの説にておのれはしたかひがたし。

試にある人にむかひて、わぬしは用（モチヰ）を主に、餅飯（モチイヒ）を客にして、假字みだれたる世なれば、飯（イヒ）をイヰに呼けんといはるれど、おのれは、餅飯（モチイヒ）を主にして、用（モチヰ）を客にして、たとへモチヰと、用の假字を、その世に書く人ありぬとも、餅飯（モチイヒ）にいひかけたるがあれば、此假字はモチヒならんといはむに、かちまけなきやうにおもはる。或人、假字はみだれても、詞のはたらきはみだれざるものなれば、モチヰルとありて、又モチヰレバと云活もあれば、一段の活うたがひなしといふめれど、上にのせたる二人丸秘抄・類字假字遣など、ふたかたにいひて更に定見なし。又モチヰレバといふ詞も、僅に一處にて、それに刊刻のものにあらず、いかでうけばりて證となすべき。蜻蛉の、モチヰルベシ・モチヰルマジといふによりて、一段の活といふは、一理なきにあらず。されど、光廣卿のかゝれたるつれ〴〵草にモチフル・モチヰルとふたかたにかければこれら確證になしがたし。もしかちまけなからむには、こゝにいふ事あり。わがかたには正しき餅飯の假字を主にして、是までは證を見いでざる用の假字をさだむるに、わぬしは、證なき用の假字を主として、證のある餅飯を、その比はモチヰならんといふはいかゞ也。いづくに、後世は飯をイヰといひしに一定したる證あるといはゞ、その人猶いふべきふしありやなしや。

『和名抄』官職部「大炊於保爲乃豆加佐」とあるなどを證にすべきか。されどこれは誤字也。飲食部「强飯古波伊比餅毛知比」とあるこれよろし。十卷本には官職部なし。

そもそも、世の中、假字みだれたる世なればとて、假字をみださぬ人なしとはいかでいひきるべきや。……假字みだれたる世にいひ出る詞は、皆古言の證にならずとはいふべからず。それもその人、一より十まで、あやまりなしとにはあらず。こゝにあやまりて、かしこにあやまらぬも有べし。かしこによくてこゝにあしきもあるべし。……俊頼・仲正などゝ、外の歌にたとへ假字たがへるがありとて、それを咎めて、こゝの證にせぬは古書をよむの法にあらずかし。

ハヅル、と云詞、古書に假字の證なきを、本居氏の、姑く世にかきならへるにより、豆の假字とさだめられたる事、『古事記傳』卅一十四オにみえたり。本居氏の識見うべなること也。是によりても、此用字の假字よ、假字みだれたる世なればとて、たしかなる詞にいひかけたるを證とせぬことやあるべき。今このハヅスは、別證・いひかけもなく、たゞよにかきならへるをだに證とする、是後學の法にこそ。

こちよりては、古假字・今假字と云名目もありて、きはやかに分別あれど、中むかし、物のみだれゆくそのかみ、いかでぞ法則のあるべき。さればこゝにみだれずして、かしこにたがふふしもあるべく、左にふみそこなへるも、右にはたじろく事のなきもなどかなからむ。すべて物ごとみだれそむるはじめに、いかで約束のあるべき。

さらば俊頼・仲正のころ、飯をイヰとたれさだめ、用をモヰとたれきはむべき。此こと味よく解したらむには、俊頼など飯イヒとよみたらんもうたがひなるべし。今よりみれば、鴻溝の有やうにおもはるゝは、今人の情をもて、古人をおしはかるにてあたらぬ事のみ多かるべし。

……

○もちゐると物にみえたる例

『源氏』夕霧。湖月本廿五ウ

そこの心きようおぼすとも、しかもちゐる人はすくなくこそあらめ。

『蜻蛉日記』巻中之中、刊本十七ウ

夢をも佛をもちいるべしやもちゐるまじや解環本にはもちゐるとあり。

『散木奇歌集』九、雜

田上に侍ける比、こもりが、いねといふものをみそうづにして侍りけるをみてよめる、

ほうしごのいねとみしまにもちぬればみそうづま

もちいる(用)

てもなりにけるかな　孝、所藏本如レ此羣書類從本もおなじ。岩崎美隆は、いかなる本をみられたるにか。モチヰレバとありといへる　その本可尋。○編者いふ、岩崎美隆は河内の人、村田春門の門人、かつて「もちふといふ詞の用格」といふ說を草せり。下に擧げたり。

『空穗』藤原君。板本卅一オ

たかき位をもちゐるべからず（ナシ一本）（を一本）　一本によるに、うけばりてこゝに引出べき限にあらず。位に居といふ事なるべし。用にはあらじ。

『身形見』第廿七、羣書類從、四七八

三十一字の歌のさまよきをぶつたいともちゐる也（佛體）

○もちゐ・もちひ・もちい・もちゆ一定せざる文ども

『發心集』一、慶安四刊本七葉

いともちいる事なし。　これは、ヤ行か、ア行か、さては又イ・ヰ混じてワ行か。

『同』七、十一葉

もちひられず。　これはハ行也。

『同』八、四葉

もちゆるがごとし。　これはヤ行也。

『徒然草』烏丸光廣卿自筆上、第六十

又こと用にもちふることなくて、　これはハ行也。

『同』下、第八十一

したがへもちゐることなかれ。　これはワ行也。

○もちうるといへるは

『倭玉篇』

「用（モチウル）」とあり。撰者しらねど慶長の刊本なり。

○もちひると一定したるは

『袖中抄』一、もずのくさぐき。印本

此義申侍しかど、人もちひず侍き。

（用の假字）

三　井上文雄

義門法師、『かげろふ日記』『源氏物語』などにより、一段の活用ぞといへるより、今の人々、大かた用ヰ（モチ）のかなとせれど、いかゞあらん。もと此詞の意を考るに持といふ詞の活用（ハタラキ）たるものと思はるれば、　編者いふ、頭書に、「うつるをうつろふ、

本田日神

すむをすまふなどいふ例にて、もつをもちふといへり」と記せり。猶本居翁の、は行の活用とせられたるによるべし。

『かげろふ日記』『源氏物語』などに、たゞ一所づゝあるを證とせんことおぼつかなし。假字がきの書は假字の證にひきがたし。又『類聚名義抄』なども、寫本にて傳はりたるうへに、「任モチイテ 以モチヰル モチウ 佷モチヰル 雌モチヰル 行モチイル」など、樣々にかきたれば、證とはしがたし。

おもふに、此詞中頃より、俗言に、もちひるといひなれしを、かなのさだなき世なれば、かくモチヰルともモチイルともかきしなるべし。定家卿の歌合の判辭に此詞あるも、專ら當時の俗言なれば也。歌の判辭はもはら俗言をもまじふればなり。今俗のことばにも、戀ふるをコヒル、强ふるをシヒル、佗ぶるをワビルなどといへり。又一段の活用は、イキニヒミヰの外あることなし。またヒキヰルといふ詞は、もと引集(ヒキヰ)るの二言の一語になれるものにて、此用ひの語の證もちいる(用)とはなりがたし。

（いせの家づと一の二五丁）

四　渡邊眞楫

用の字の假名、『六國史』『萬葉集』にも見えぬをもて定むべきやうなく、波行といひ、和行といふ。其あげつらひ、かたゞにわかれたり。

波行といふ者は、俊賴の歌に、「今よりは吾をもちひの鏡にてうれしき影を寫しそむべき」といへるを引て、徵とし、

和行といふ者は、『蜻蛉日記』を引てあげつらへり。今『蜻蛉日記』を見るに、山寺にこもれる條に、「二十日ばかりおこなひたる夢に、吾かしらを取おろして、額をわくと見る。あしよしもえしらず、七八日ばかりありて、吾腹のうちなるくちなは、ありさて膽をはむ。是を治せんやうは、おもてに見つなんいるべきと見る。是もあしよしもしらねど、かくしるしおくやうは、かゝる身のはてを見聞ん人、夢をも佛

をももちいるべしやもちゐるまじやと定めよとなり云々」と、もちいる・もちゐる二様に書たり。おもふに、もちいるは持入にて、夢よ佛よ、吉凶のうへにもちいれて、たのむべきやいなやといへる言とおぼゆれば、和行のかたは、取りがたきものにこそ。

『萬葉集』巻四、中臣朝臣東人贈阿倍女郎歌に、「獨寢て絶にし紐緒ゆゝしみとせんすべしらに音をのみぞなく」といへる答歌に、「吾以在三相二搓流絲用而附手益物今曾悔寸」と、以・用同じ意に用ひたり。また巻八に「黒木用」と二所あり。祝詞にも、「何を持豆」「何を以豆」と書り。されば持・以・用三字みな同言にて、別に、用ふるといふ言あるにはあらず。持・以を延ていふのみなり。たとへば、丹を延て、にほひ・にほふ・にほはすといひ、秀を延て、ほぎ・ほぐ・ほびこる・ほこる・ほころぶ・ほとびると、さまざまにいへる類なり。もち・もちひ・もてる・もちふる・もたん・もちひん・もたまし・もちひまし・もてよ・もちひよ・もため・もちひめ等みな延ていふのみなり。神代に、大穴牟遲神・大巳貴神・大汝神など、様々にかけども、其名義は大名持神なり。また佐比持神・保食神あり。『仁德紀』に、口持臣『履仲紀』に車持部あり。太宰府を於保美古止毛知乃司といふ。然して、用ふるといふ言の見えざるは、持・以・用同じ言なればなり。是をもて見るに用字の假名は波行と定むべきものなり。

（如蘭社話巻一五）

五　物集高見

もちふ（用）　この語は、もちといふ（持）語の、上二段にはたらきたるものにて、將（モチ）と率（モチル）との連合の語にはあらず。

すべて、波比不閉（ハヒフヘ）の音は、名詞を動詞とするときの語尾となる例なり。荒といふ名詞を動詞とするときに、荒び荒ぶ荒ぶる荒ぶれといひ、萎（シナ）といふ名詞を動詞とするときに、萎び萎ぶ萎ぶる萎ぶれといふと同じ例なり。

さるに、將率（モチヰル）なりとて爲（ヰ）・爲留（ヰル）・爲禮（ヰレ）の上一段とさだむるものしりびとあり。その人の主とするあかしは、ひきゐるといふ語にて、そのひきゐるといふ語は、引率（ヒキヰル）の連合なるにより、引率（ヒキヰル）の方は、意（コヽロ）、率にありて引（ヒク）になく、將率（モチヰル）の方は、將（モチ）に意ありて、率（ヰル）になし。あはれ語の眞をしれらんものゝ、いかでかはまどはされん。

（日本大辭林 ○『かなのしをり』にも）

六 田崎五百穎が、ハ行上二段活の說、および これに對する、木村正辭の辨駁あり。煩冗なれば、今その要點を摘出すべし。

田崎五百穎

（一）一段の活語は、一言やがて一語なり。然るに用ふは、三言連りて一語をなせる詞なれば、いかで一段の活語といふことをえん。かの率ゐといふ語の如きも、和行中二段の活にして、一段の活用にあらず。そは、試みといふ語、もとは、心見の合名詞なれど、一段に活くことなく、麻行二段に活用せるが如し。

（二）和行上一段活とすれば、見・著などゝ同じく、斷止段に結ぶときは、もちゐるといはざるべからず。

皇朝の詞、いかでかくのごとく、いやしげに頽れとゝのはざる結びあらむ。これを波行中二段活に、もちふといへるに比ぶれば、そのおとりまさり、すこしく活語をしりたらんものは、おのづから辨へぬべし。

（三）『土佐日記』二月八日の條に、「けふはせちみすればいをもちひず」とあり。この本は、文曆二年定家、貫之の自筆本を寫し、又明應壬子仲秋妙壽院の寫しゝをば、北村季吟の物せし本なれば、いとも動なき證とはすべし。されどなほ誤もあらんとて、二三本を見るに、皆いづれも、もちひずとあり。

木村正辭

もちいる（用）

もちいる（用）

（一）率ゐの活用の、一段なることはいふまでもなし。試みの活用を、『詞の八衢』に、中二段の活詞とせるは、誤にして、一段活なること、古書に其の證數へ盡しがたし。

（二）もちゐると斷止するを、いやしと論者は思へど、其の實いやしからざるも知るべからず。又、見る・着るはいやしからずして、もちゐるはいやしといへるもいかゞなり。古書に例證あるにも拘らず、詞の優劣を以つて、活用を定めんことは、いと强ひたる事なり。

（三）『土佐日記』云々は、思ふに、北村季吟の『土佐日記抄』の事をいへるならん。その奥書によるに、文暦二年、定家が貫之の自筆本によりて寫したるを、明應壬子に妙壽院の傳寫したる本を以つて季吟の注せしなり。然れども定家の頃は、假字遣みだれたるのみか、一種の假字用法行はれたれば、よしや其の原本は、貫之の自筆にもせよ、假字遣は、その世の用法に書き改めたること疑なし。そは、今日に傳れる『二十一代集』をはじめ、諸の物語・日記などの假字の、正しからざるにて知るべし。又北村季吟も、定家假字を用ゐたる人にて、同人が注釋せる古書を見るに、假字の法則の正しきもの一もあることなし。かゝる假字違ひの多かる本を證として、用の字の假字を定めんとするはいとかたはらいたし。

（大八洲雜誌卷九〇・九一）

此の他、橘　成員（倭字古今通例全書）　市岡猛彦（雅言假字格）　春登（假字音便撮要）　本居春庭（詞の八衢）等またハ行上二段活の語とせり。

村田春海が『もちひ』は俊頼の歌に、「我をもちひのます鏡」（編者いふ、永久百首春の部に「けふよりは我をもちゐの增かゞみ嬉しき影をうつしてぞみる」とあり。夫木集春の部にも出でたり。）と。餅にいひかけたるに、しばらくよりてあ

るべし。ゐの假字とせんは、據なき說也」と『增補古言梯標註』若桂（三一丁）にもいへるは二段活か一段活か明ならず。されど『若桂』の文に此の語を上二段に活かして用ゐたるを見れば二段說なりしこと明なり。

二　モチヒル（ハ行上二段活）

敷田年治　年治按に、是はもちひ・もちひるにて、波行一段の活用なりけり。先モチヰならざる徵をいはゞ『散木集』に、田上に侍りける頃、かみの里といひける處に、湯あみして云々。いかなる神のおはしますといふを聞て、俊しげがたはぶれて申ける。「あれこそは、もちひの宮と聞からに、つくゝと思ふ事をこそ祈れ」といふを聞て、和し侍りける。「あれと見ばさしても誰もまゐらましよそにもちひの宮づかへして」「もちひの宮」は『歌枕名寄』に近江餅宮（モチヒノ）とあり。あれは『和名抄』に、餅粉、阿禮。つくゝは搗々。さしては、串に刺して人にまゐらする狀。いづれも餅に由ある語を、可笑（ナカシク）とりなして、さてはじめの歌には、餅粉（アレ）をこそ用ひと言掛、次なるは、他處（ソ）に用ひむやと云意（フ）を、「もちひの宮」に言よせたり。又『同集』に、齒がためのの鏡の折敷のしき物に書付侍りける。「我をのみ世にもちひのかゞみ草咲さかえたる影ぞうかべる」『永久四年次郎百首』俊賴朝臣「けふよりは我をもちひの鏡草うれしき影をうつしてぞ見る」夫木集一にも載たり。

以上餅に言掛て、用の假名のモチヒなるを知る徵に足れり。……餅（モチヒ）は、例の假名遣編者いふ、釋行阿の假名文字遣をさせり。にい部に「もちい餅粮」又ゐ部に「もちゐ餅」とあれど、皆後世の僞書なめれば、據としがたし。但普通に書ならへる後の假名は、モチヰなり。其（レ）に云掛たる用も、ともに亂れてモチヰなめれば、慥に用（モチヒ）なりし證には爲がたしといはむか。

されど餅（モチヒ）をモチヰに誤りたるは、甚後のことに社あれ。

もちいる（用）

『和名抄』『新撰字鏡』等に、餅を毛知比と註せるは更にもいはず。近は『權中納言定頼卿集』に、こめだい。もちひこめだいとは、言籠る題と云事にて、即物名の一名なり。「かづきけむあまのしわざもちひろなるみるめしなくばかひあらじやは」　此程まで、餅（モチヒ）を正しくモチヒと云りし、これ彌明かにて、用の假名も更に頽れざりし也。……又『續紀』三十の宣命に、「過乎知天方必改與能乎得天方莫忘止伊布然物乎口爾我方淨之止云天心仁穢乎波天乃不覆地乃不載奴所止成奴此乎持伊波稱乎致之捨伊方謗乎招都」　とある持伊波は、用ひばなり。此を伊に誤れる例は、『同紀』十七に、「是以主多知大臣乃子等治賜伊自天皇朝爾仕奉利」　又「是以（コヽヲモテ）子波祖乃心成伊自可在」　など見（ル）べし。

偖、此持伊波（モチヰ）を『詔詞解』に、「持伊波（タモツヰ）　伊波とつゞける助辭めづらし」　と云て、助辭と解けるは、ひがことなり。この持伊に對へて、捨をキラヒと訓べし。其は、『神武紀』に、手端吉棄の古注に、「多那須衛能余之岐羅毗」　とあればなり。

この捨（キラ）ひは、常には四段の活語なるを、爰に捨伊方とあるを思へば、中二段にも活用く語なり。右の徴等を併て、毛知比の假名を知るには飽足れり。

是は『八千俣』に、中二段とあれど、波行一段の活用なり。さるは『空穗物語』藤原君に「つたなきにて、高さくらるもちひるべからず」　本には、もちいるべからずとあり。『蜻蛉日記』中ノ中に「ゆめをも佛をももちひるべしやもちひるまじや」　本には、もちゐる『宇治拾遺』十五廿四に「すみやかにはしりかへりぬ。一（ヒトツ）も用るべからず」　猶多かれど、悉くもらしぬ。これをモチヰと誤れるは、强・水鷄・遂・椎・新・初・魂・櫟・槭・涯（ソコヒ）・住（スマヒ）のヒをヰにあやまりたると同例なり。……『類聚名義抄』に「用（モチヒ）（モチウル）」『字鏡集』に「以（モチヰ）（モチウル）」　とあるは、老をオヒと誤りてやがて、老（オフ）とも活くが如し。

（假名沿革下の六丁　○古事記標註にも）

小山田與清が、『松屋筆記』國書刊行會本第一の六一頁に、『相如家集』に、「あつまりて物なおもひそをのこどもあけん

みかどのもちひなりけり」　此歌も、餅と用とをかけし歌也」といひ、又『同書』第三の八〇頁に、『俊頼の『散木奇歌集』十卷ノ雜ノ下　羣書類從二百五十四下卷廿九丁右　田上に侍りける比、こもりが（木守が）いねといふ物を、もちひにして、とり出て侍りけるを、またのひ、みそうづにして侍るを見てよめる　「ほうしごの稲と見し間にもちぬればみそうづまでもなりにけるかな」　もちぬればを、古本にはもちひれば に作れり。餅をたちいれたれば、古本の方然るべし」と記せり。これによりて想ふに、與清もハ行一段活の説なりしにはあらざるか。

又石川雅望も、『雅言集覽』もちひの條に『源氏物語』夕霧の卷湖月抄本二五丁　の文を　『そこにこゝろざようおぼすとも、しかもちひる人はすくなくこそあらめ』　と書し、其の他の例もすべてハ行の活用として引けるより察すれば同じくハ行一段の説なりしやうなり。

もちいる（用）

三　モチウル（ワ行上二段活）

一　谷川士清　もちゐ　用をよめり。庸も用也と注せり。以將（モチヰ）の義なるべし。もちうともいへり。……

一説に、『藤原經衡家集』に　宇治殿にてもちひをおこすとて「さかなには何もあれども此中に心につかばは是をもちひよ」　返しにも、心もちひとよみ入たり。されば、もちひ・もちふのかなるべしともいへり。

（倭訓栞）

二　黒澤翁滿　用の字のかな、縣居の翁は、もちゐ・もちうと定められ、本居氏は、もちひ・もちふなりと云れど、『源氏物語』『蜻蛉日記』などにもちゐると云る事所々に見えたり。其心を考るに、持て居る事にて、後には輕く云馴たる物とおぼし。さては一段の活詞なりといふべけれど、『日

本紀』に、「急居此曰菟岐于」とある（編者いふ、日本紀卷五にあり。）活らき、則（スナハチ）此詞にあたれゝば今は縣居の翁に從へり。

（言靈のしるべ上の二三丁）

三　太田方

モチヰは持（モチ）と以（ヰ）との二語にて、一言にはあらず。其證は、『日本書紀』一書「于時權用（モチ）他姫婦以（ヰテ）乳養皇子焉此世取乳母養兒之緣也」とあり。用某（シカ〳〵ヲ）以の二字は、モチヰと讀る也　本書には、「豐玉姫將（ヰテ）其女弟玉依姫來到」とあり。又、一書には、「遣（マタシ）女弟玉依姫以（ヰテ）來養者也」又、一書には、「留其女弟玉依姫持養（モテ）兒」とあり。又別ところに、一書、「卽遣一尋鰐以（ヰテ）奉送焉」とあり。

「將云々來」とあるは、ヰテキタリと讀み、「遣云々以來」は、マタシテヰテキタリと讀み、「留云々持」は、トヾメテモテと讀めり。此持の字は、用をモチと讀る意にて、何れも同じ事を、文を異にしてあれども、用・將・持の三字は、モチと讀み、將・以の二字は、ヰと讀みて、將來（ヰテ）と以來（ヰテ）と同語勢なるをもて、「用他姫婦以養」は、モチ・ヰテと讀るを知るべし。然るを舊點に用をトリとよめる非なり。是等皆、用を毛知爲と古くより遣（ツカヒ）たる意なり。

是の如く毛知爲は一語にあらず。持（モチ）と以（ヰ）と二言の連なりたるにて、本は佛書より出しなり。二言の一語となれるは、率をヒキヰといふも、引と以との連りなり。非字をアラズと訓るも、在と不との連れるがごとし。『佛說觀無量壽經』に「瓔珞盛漿持（モテ）用（ヰテ）上王」　『法苑珠林』十三、因緣部に「言一切難捨無過己身我等今日不能捨心持（モチヰテ）用相與」　『同上』十六、求婚に「時諸獸中有一牛王向於牌（メトラ）虎而說偈言世人皆取我之糞持（モチヰテ）用塗地爲清淨是故端正賢牌虎應當取我以爲夫」　『同上』十四、誕孕に「如因果經云菩薩處胎垂滿十月身諸支節及以相好皆悉具足夫人憶入園遊觀王勅後宮端正采女凡有八萬四千以（ヰテ）用持摩耶夫人」　『同上』十六、求婚に「食粮罄盡王子遊獵殺捕諸蟲以（モチヰテ）用活命」　『同上』十七、離俗に

「偈言太子以下右羅網指萬字千輻輪相現ニ金色一柔輭清淨手上用摩ニ馬王揵陟頭一」　『同上』三十三、法施部に「迦葉經爾時世尊而說ニ偈頌一曰三千大世界珍寶滿ニ其中一以レ此用布施所レ得功德少」　『同上』廿九、優劣に「佛說華聚陀羅尼經云佛言若復有レ人持ニ以七寶如ニ須彌山等一於ニ一却中一布ニ施聲聞辟支佛一不レ如下有ニ出家在家人一能持ニ一錢一以ニ用布施一初發ニ菩提心一得福德多上」とあり。古へは佛法盛りに行れし故に、持用・以用の連語を『書紀』にも遣ひ給ひしなり。其がいつとなく、皇國の一言のやうに、人々思ふことになりし也。『韓非子』說林に「老馬之智可レ用也」　『佩文韻府』道字に「引ニ老馬之智可下師也一」　『周禮』旅師注に「師帥也」とあり。帥は率と同音義にて、率ともヒキヰとも訓り然れば、師・帥・率・用の四字皆同じく、ヰと訓ずべし先達ち自在に引廻す意なり。

又「左右曰レ以」の以字も古來ヰの假字也。此は萬葉集(四)雖率有(ヰタレドモ)とある率の義也。『論語』に「佛肸以中牟一畔」とあるを、『說苑』もちいる(用)立節に「佛肸用ニ中牟之縣一畔」とあり。『國語』魯語に「魯人以ニ莒人一先濟」注、「以用也」とあれば、用字をヰと訓ずべき證なり。

又將率の將をヒキヰともモチとも訓めば、用・以・持の三字同じくヰともモチヰとも訓むべし。假名遣ひの徵に、唐山の書を引も、いかがなれど、訓義は互通のものなれば、此方の言にも徵すべし。

『つれつれ草』五ノ七十七「ある有職の人、白きものを衣たる日は、火筋をモチヰるくるしからずと申されたり」　又『同上』八十一「錢を奴のごとくして、つかひ用るものとしらば、ながく貧苦をまぬがるべからず。君の如く神の如く、おそれたふとみて、したがへモチヰることなかれ」とあり。契沖氏の說に、「用、モチヰ。常にかやうにかけり」といはれたる所の常は、『つれ〴〵草』などを指ていはれしならん。

扨又、餅を毛知比の假字は、『字鏡』『倭名鈔』に見えて正しきは申すまでもなし。然るに、今の世に、『定家假名遣』『倭字通例書』など云物には、「餅をモチヰ、飯をイヰ」とあり（定家假字遣には、比の部に、「用モチヒテ」ヰの部に、「用モチヰル」と兩出したり。）是等を觀れば、『夫木集』も『經衡集』も、俱に餅は毛知爲に訛りて、用の方は訛ることなく毛知爲なるも知るべからず。然れば、餅にかけたりとて、波行の活用とも一定しがたし。因て姑く契冲氏に從て、毛知爲の假字とせり。……扨又、活用は和行にて、モチヰ・モチウといふべし。急居の訓ツキヰをツキウと訓る例なり。

（毛知爲考）

『毛知爲考』は、山崎美成の『海錄』（八の一五丁）に載せたるを、前略して引けり。さて『俚言集覽』もちゐの下なる說と對照するに、語句さへ全く同一にして、唯『俚言集覽』なるは、佛經の例證少きが、その異れるのみ。

世に『俚言集覽』を村田了阿の著とせるより、此のもちゐの說をも、了阿の說として引用せる人あり。今は『海錄』によりて、太田氏の說とせり。

そも〳〵『俚言集覽』の全體が、了阿の著述にあらざることは、先哲の論ずる處にして、本書中には、「愚案」「移山案」「方案」の三案あり。そのうち「愚案」最多く、此もちゐの說、また「愚案」と記せり。されば、本書中「愚案」とある中には、「方案」と同じく、太田方の考案も交れること明なり（或は「愚案」とある全部が、方案なるべきも知るべからず。）中根肅治が「方案」を太田方の案なりと推定し、かつ書中に、福山地方のことを多く記せるによりて、本書の著者を太田全齋なりと斷定せしは、やゝ早計に失したれど、全齋の說の多數を占めたることは愈疑ふべからざるなり。なほ、のうれん（暖簾）の條なる參考をも參照すべし。

本田日神

四　權田直助

用は、『山口栞』の説によりて、一たびは上一段の活とせしかども、猶よく思ふに、これもゐと云ふは、率の意（編者いふ、本文の前に、「率。この詞上一段とせる説あり。そはゐ・ゐる・ゐれと云ふときの事にて、上にひきと云語のそはるときは、中二段となることゝぞ思ゆる、居は一段活なれども、つきと云語そはるときは、上二段の活詞となること下の説の如し」とて、中島廣足が詞の八衢補遺ゐるの條に急居を苑岐子と日本紀に訓せるにより、「ふるくは、居をうとも活かしいひしことしられたり。されば、萬葉なる雖立（タツトモウトモ）雖座といふ訓も當れりとおぼゆれば、ゐるは中二段にも活きしなるべし。さらば、にて、そ率のゐも同様の活とこそいふべけれ」といへる説を引きたり。）れに持ちと云ふ語のそはりたるなるべければ是も上二段に、もちゐ・もちう・もちうる・もちうれと活く詞とすべし。

（詞のやちまた權田翁書入國語研究室藏）

此の他、契沖（和字正濫鈔二の二四丁）は『もちゐ』此假名いまだ慥なる證を勘かへず。常にかやうにかけり。是正字ならば、はたらく時、もちうといふべし。ゐとう五音の故なり。もちゆといふべからず』といひ、楫取魚彦（古言梯）も『もちゐ（もちう）。此假字見えず。しばらく是による』といへり。

もちいる（用）

四　モチヰル（ワ行上一段活）

一　義門　もちふ　『古事記傳』十七巻に、源仲正の歌を引證しての明辨出てより、誰もさぞと知れるなるべし。

（俊頼朝臣の歌にも「けふよりはわれをもちひのます鏡うれしきかげをうつしてぞみる」とあれば、記傳の考いよ〳〵信從すべし。）

たゞし、『閑居友』に「ふつにもちゐることなかれとはいましめ給はず」とある如く、かの吉水僧正の比は、これを和行一段の活の格につかひしならんと、かつはおもひよりて、猶考ふれば、尚ふるくよりも、しか活かせるためしありき。

『蜻蛉日記』に「夢をも佛をもちゐるべしや、もちゐるまじや」とあるをみるに、べしといふ辭、まじといふテニヲハへ、る文じよりかゝれるは、必一段の活さ言なる例なり。かくておもへば、『夕霧巻』に「人の御名を、よさまにいひなほす人は、かたきもの也。そこに心清うおぼすと

も、しかもちゐる人はすくなくこそあらめ。こゝろうつくしきやうに、聞えかよひ給ひて、尙ありしまゝならんこそよからめ」とあるも、ゐ文字、本より誤りにはあらで、かの「夢をも佛をもちゐるべしや、もちゐるまじや」と同例なりけり。さればぞ、此物語は、數本を見あはせて、人々のとかく校合すめるにも、こゝのかはれるはなしと聞えたる。

そも〳〵、此『夕霧卷』、あるは『閑居友』などのは、ふをゐとあやまれるならんともいへば、いはれぬべけれど、『かげろふ日記』なるは、いかてさはいはん。『和語燈』七の一「病おもければ藥を用ゐるが如し」と見えたるなども、これらに考へ明むべし。

編者いふ、此の説は、『山口栞』中の四一丁にあり。指出廼磯（七丁）にも同意の説を記せり。「記傳の考いよ〳〵信從すべし」とあるを見れば、初はハ行上二段活・ワ行上一段活の兩用説なりしが如し。然れども後には、ワ行上一段活に斷定せしこと、下なる八木村正辭の説の終なる編者の附記を見て知るべし。又『指出廼磯』に、「用ゐるのことは『活語雜話』四編に論定す」と冠註せり。四編は、世に公にせられざれど、その決定せし所以また八の附記の文を見て、ほゞ察知することをうべし。

二　萩原廣道

もちふるとある詞は、『古事記傳』に餅（モチイヒ）にいひかけたる歌をひきていはれたる事ありて、定まれるが如くなれども、もちゐる・もちゐれと活きたる例あれば、猶いかゞあらん。そのうへ、いひかけの句は、洗ふを荒鵜（アラウ）にかけたる歌などもありて、下の活きのもじまでをば、思はぬさまなれば、かたゞこゝの活とは定めがたし。案に、これは以（モチ）と率（ヰ）と二合（ツ）せたる詞にて活きは一段の格なるべし。

（心の種下の二九丁）

廣道が、いひかけの説につきて、參考すべき説、近藤芳樹の『寄居歌談』四の一五丁にあり。其は、千種有功が歌

に、「くれなゐにほへる鶴のいたゞきは八千代ふりにし霜やそめけん」とあるを、小林歌城が、四句ふりにしは、へ・ふ・ふるのさだめに違へりと、難じたるにつき、芳樹が意見を述べし條に、

へ・ふ・ふるは經のかた、ふり・ふるは舊のかたなればかよはしがたき、論なけれど、雨・雪・霜などにそふるときは、かうやうの例かずおほくて、『續後拾遺集』に「今いくか日かずもふりぬつのくにのながらの橋のさみだれのころ」『延文百首』に「かひなしや月の夜ごろもいたづらにふり過ぬべきさみだれの比」『四十番歌合』に「冬がれのよもの木のめもはるさめにわがみつれなき年やふりなん」『夫木集』「雫そふ水まで石をうちわびてうきさみだれにほどふりにけり」また「まがねふくおとたえにけりさみだれの日數ふりゆくきびの中山」これら其證也。

もちいる(用)

鈴木高鞆云、こはおもふに、經(フル)はふの一言にとゞまりて、りはたゞ降(フリ)のかたのみにかゝれる詞なるべし。『拾遺集』旋頭歌に「あづさ弓おもはずにしていりにしをさもねたく引とゞめてぞふすべかりける」これは、入に射をかねたるなるを、射のかたは、いの一言にて、りは入にのみかゝれり。そはもとより、射はいりとはたらかぬ詞なれば、かく經・射は、ふ・いの一言にて、語をなせれば、さもいひつべきことなるを、この外に、いひかけの詞の、語をなさで、外へうつるがおほし。

そは、不知を「しら雪」「しら波」など、しらのみにてやみ、不言を「いはし水」「いはでの森」など、いはのみにてやみ、不止を「やまぶき」「やましろ」などやまにてやみて、外へうつせるたぐひ也。「ゆふ月よをぐら」「あふことのかた糸」なども、をぐらの

かたは闇き、かた糸のかたは難さと、きもじをそへねばとゝのはぬことばなることおなじ例なり。

『夫木集』に「我をもちひのますかゞみ」とあるより、用の假字を、もちひとかき來れるを、或人、用ゐるといふ例を、あまた引出て、もちゐと定たり。用はまことにもちゐなれど、「われをもちひのますかゞみ」は、鏡・もち飯をよみこめたれば、此うたにては、ひならではかなはず。そは、これも用のかたは、たゞもちにてきれ、ひは餅にかゝることとすれば、かなたがひのさまたげなし。されば經と降とのいひかけも、誤にはあらじといへる、いとつばらかなる論なり。

とあり。

三　岩崎美隆

ちゆといはれけるを　此は、心得るといふ事を二百年前の書にこゝろゆると書る類にて、後世の僻說なること論なし。

もちふといふ詞、岡部翁などは、つねにも『古事記傳』に、源仲正の餅を兼てよまれたる歌をひきて、もちふといふべきよし定められたるより、諸先生皆此說にしたがはれて、今はたれも〳〵この活きはもちふといふ事となれり。　已レもこれにしたがひて、常にもちふといひ來れり。

かゝれば、今更とかく論ふべきにあらねど、猶うたがはしくおもはるゝよしあり。

さるはこの詞ふるきものにみえたる例を考ふるに、いとおほくはみえねど、『蜻蛉日記』にもちゐると書る所あり。又『源氏物語』にもちゐるとかけり　此源氏はつねにみる書なれど、心づかざりしを、近き頃、義門師の山口栞にひかれたるをみておどろかれぬ。

かくふるきものに、もちゐるといへる證はあれど、もちひ・もちふなどいへる例は、一所も見當らず。

猶いはゞ、仲正時代より少しくだりてのものながら、『雅亮裝束抄』にも、もちゐると見え、又少し下りては、『萬葉仙覺抄』『玉藻』などにもさやうにみえたり。　松浦宮物語といふものは、貞觀年中にかけるよし奥書あれど、其はいとうけがたき事なれど、無下に近世の僞書とはみえず、やゝふるきものとは見ゆるを、それにももちゐるとあり。

されば『蜻蛉日記』をはじめ、五六百年にての假名の書に、もちゐるといへる例はおほく、もちひといへる例は見當らねば、今にしてもちひと定めむ事心ゆかず覺ゆ。されどもちひといふ方につきてあらがはゞ、彼仲正の餅をかねてよまれたるを慥なる據ともいふべけれど、加樣の秀句は、假字違ひにかかはらぬ事もありて、戀に木居をかね、逢初に藍染を兼てよめる類なるべければ。これをもて慥なる證とはうけばりがたくや。

既に仲正同時代なる俊賴朝臣の『散木集』にも、田上にはべりける比、こもりがいねといふものをもちひにして、取出て侍けるを、またの日、みそうづにして侍るを見てよめる

「法師子のいねとみしまにもちゐればみそうづまてもなりにけるかな」とみえたる。此三の句も、用に餅をかねてよまれたれど、此詞うちまかせては、もちゐ・もちゐると活けばこそ、もちゐればとよまれたれ。もしもちふと活く詞ならむには、いかに秀句なりとて、もちゐればとはいかでかよまるべき。編者いふ、前に出せる敷田年治の説の終なる編者の附記參照すべし。さればこの『散木集』の歌にても、仲正の歌なども、餅にかねてよまれたれど、此詞をうちまかせて、もちふと活く證にはとりがたき事をしるべくや。

（もちふといふ詞の用格）

四　黑川春村　近來、用の字の活用（ハタラキ）ざま、諸説區々にして一定ならず。……抑此四種編者いふ、ヤ行中二段・ワ行中二段・ハ行中二段・ワ行一段をいふ。のうちに、決なくよろしと思はるゝは、ワ行一段のはたらきざまなり。これは、若狹人義門上人のこゝろづきにて、『山口栞』中卷四一右に見えたり。……されど、その徵（アカシ）どもの、あまたしもあらぬによりてか、さのみうけばりてもいはぬからに、世の人、普くも信用せぬげに見えたる。故（カレ）いまこゝにひろく明文をのせて、治定すべきやうを示しつべし。

『空穗物語』藤原君三一右「つたなき身にて、たかき位をもちゐ

るべからず云々」

『類聚名義鈔』人部佷モチヰル　雌モチヰル　辵部遵モチヰル　目部自モチヰル　田部由モチヰル　月部用モチヰル　髟部肆モチヰル　手部控モチヰル　乙部已モチヰル　貝部費モチヰル　水部溟モチヰル　言部試モチヰル　虎部虒モチヰル　寸部尋モチヰル　食部食モチヰル　㫃部施モチヰル

『原本以呂波字類鈔』下　毛部、辭部用モチヰル余頌反　扁云容登ー・仁・御舉・須ー・已・尋ー二筆硯ー・行・注・食・以・控・肆・自・由・試已上同

『平他字類鈔』中三十右　扁モチヰル　以同　用同　試同

『字鏡集』糸部繇モチヰル　○集中、なほ數字あれど、今は幷略きぬ。

『古鈔本奥義抄』上三種躰條「シカリトイフトモ、ヲホクハモチヰルベカラ爪。云々」

『薫集類抄』十七左黒方「くろぼうをもちゐるべきなり。云々」

『簾中鈔』巻四日次條「これをもちゐるべし。云々」

『雅亮装束抄』中九ノ左「正月以後いごならばこうばいは紅梅もちゐるべからずと申す。云々」

『松浦宮物語』上藏本十四ノ右「人をもちゐることは、たゞそのかたちこゝろにしたがふべしと、云々」

『同』中二ノ左「はかり事おろかに、つはものをもちゐる事かろ〳〵し。」

又、十ノ右「燕王のもちゐるところは、云々」

『梁塵秘抄口傳抄』九ノ左「四三が説に、此古柳、この説にたがひてうたはんは、もちゐるべからずとこそ申つたへたるにと云へば、云々」

『新古今集隱岐本』御序文「もとの序（ハシブミ）を、かよはしもちゐるべきにあらず。云々」

『後鳥羽院島よりの御文』扶桑拾葉集巻十一ノ八ノ左「關白已下のさはりをば、ゆめ〳〵なすまじき也。わがするといふ事ありとも、もちゐるべからず。云々」

『千五百番歌合』戀三 顯昭判詞 一ノ左 「古き人は、歌合の歌には、物語の歌をば、本歌にもいだし、證歌にも用るまじと申ければ、云々」

『觀智院本古文尚書』八ノ左 「由(モチヰル)レ聖」

『愚管鈔』卷三 藏本二ノ左 「國王御子なくば、孫子を用ゐるべしといふ道理はいてきぬ。云々」一本、もちゐるべしに作れり。

『無住雜談集』卷十 十四ノ右 「モチヰルヱノアタエムナド云テ、云々」

『假名貞觀政要』卷九 二ノ左 「カルガユヘニ、ツネニコレヲモチヰルベカラズ。云々」

『法然上人行狀畫詞』卷廿一 十六ノ右 「加樣の僻事、ゆめ〳〵もちゐるべからず。云々」

『萬葉集注釋』卷三 廿七ノ左 「發句葦邊(アシベニハ)波の字は、てにをはの字にもちゐる事常の習也。」

『同』卷一 廿四ノ左 「梵語よりはじめて、和語にいたるまで、むねとは、男聲をもちゐるを口傳とす。中略しかれば、さかともさきとも、さくともさことも いはむ、みなおなじことばにとりて、男聲をもちゐるをむねとする故に、さかといふべき也。云々」

『神皇正統記』卷六 十六ノ右 「人もえらび用られし日は、まづ德行をつくれ。德行おなじければ、才用あるをもちゐる。才用ひとしければ、勞効あるをとる」

『爲兼卿眞蹟本僻案集』古今集、「心ざし深く染てし」の歌の註 「折ければにて、下句のこゝろたがふべからず。居も歌によむ詞なれどもきよからず。折をもちゐるべしと申されし。云々」羣書類從本には、「折を用侍べしとぞ申されし云々」に作れり。

かくあまた見えたれば、ワ行一段の活用に治定して、いさゝかまどふべきふしもあらざるべし。山口栞にも見えたるごとく、もちゐるべしとる文字より、べしをうけたるが、いとおほきをおもふべし。さてまた、

『紫式部日記』上 類從本廿一左 「をり〳〵の有さまにしたが

ひて、もちひんことのいとかたきなるべし。云々」

又、廿三ノ右「すべて人をもどくかたはやすく、我こゝろをもちひんことは、かたかべいわざを云々」

『長明發心集』巻一　六ノ右「わそうのやうなるものを、おきては何にかはせん。いともちひる事なしといふ。云々」

『同』巻八　四ノ左「又益なからむ天魔は、よくけうまんをたよりとす。たとへば盗賊の中人をもちひるが如し。云々」

『長明無名鈔』下　諸浪名條「ことばの廣略なれば、時にしたがひてもちひるべしとぞ申侍しを、云々」

これらによるときは、ハ行一段の活きとも、又いふべきに似たれど、さる例は多からねば、しかりともさだめがたし。されればこれらは、ゐ文字の寫誤といふべき也。また、

『類聚名義鈔』人部任（モチイテ）イ部行（モチイル）頁部須（モチイル）水部（「須、モチヰル」とあり。）には、

『古本今昔物語集』巻十二　五段「二會ノ講師ヲ用（モチイル）云々」

『世諺問答』流布本、十ノ右「齒がためは、よはひをかたむるこゝろ也。もちゐは近江國の火切のもちゐをもちいるべき事なり」類從本には、「もちふべき事なり」と見えたり。

これらは、ヤ行一段の活きといふべく見ゆれども、これも又、等類すくなし。されば、とにかくにワ行一段をもて、正しといふべきなり。

但し、『類聚名義鈔』人部に、「以（モチフル　モチフ）」とあるをみるに、同書中にあまたあるとは別にて、ハ行中二段の活きとおぼしければ、いとも〳〵あやしきまゝに、彼伴僧信友が、東寺の觀智院なる原本もて、手づからすきうつしたる本を借もて見しに、さればこそ、其本には、モチヰル・モチウとありけるを、白墨もて塗かくして、モチフル・モチフと改めたるな

りけれ。これに、彼をぢのさかしらしつとはしられたれど、さても猶不審なるは、モチヰルはワ行一段、モチウはワ行中二段にて、其活さざま混合したり。かく二方（タ）に活く例も、ふつになき事にはあらねど（こゝろみるは、こゝろむる二方に活く例あり）上のくだりに載るごとく、一段のかたは證どもおほく、中二段とおぼしきは、たしかなる徵も見えねば、とてもかくても從ひがたかるべし。

……

次に、ヤ行中二段（もちい・もちゆ・もちゆる・もちゆれ。）の活用は、世間俗用のみにして、たゞしくは、もちゐるまじき事、論ふにおよばず。但し、此ヤ行一段には、もしはたらかすまじきにもあらねど、それはた慥かには、推決めがたきよしは、上件にことわれるが如し。

次に、ワ行中二段（もちゐ・もちう・もちうる・もちうれ）は、『大同類聚方』の藥方のところ〴〵に、あまたところ見えたると、上に引る『類聚名義鈔』（此書、栂尾高山寺にも、古鈔本一部ありて、標題は三寶類字抄とあれど、またく同本にして、異同すくなし。）に。たゞ一ところみえたるほかは、古書どもにも、をさ〳〵見およばず（大同類聚方、流布の本は、僞書にしていふにもたらねど、べちに延長三年奥書の本、寛仁三年奥書の本など、いづれも全部百卷（九本）の秘本どもあり。されどいと異やうなる文字づかひどもおほくて、ひたふるには信用しがたし。）然れば、此一二書を證として多書の徵を棄べきやうなし。故（カレ）この中二段にも從ひがたしと知べし。

次に、ハ行中二段（もちひ・もちふ・もちふる・もちふれ）の活きは、據どころなきにしもあらねば、近來この活用をもちゐる人おほかり。さるは、『經衡集』云（按に、經衡は中宮大進藤公業男、延久四年六月廿一日卒。後拾遺集已下の作者なり。）このおなじ人（宮內卿經仲なり。）宇治殿よりもちひをおこすとて、「さかなにはなにもあれどもこの中に心につかばこれをもちひよ」かへし、「君がなを心もちひのうれしきにいかなる人のなさけなるらむ」『永久百首』元日　俊頼（按に、俊頼朝臣の卒去は、大治三四年のほどなめれど、いまだつまびらかならず。）「けふよりはわれをもちひのますかゞみ嬉しきかげをうつしてぞみる」（夫木鈔春ノ一亦おなじ。）『夫木集』雜十四　鏡部

源仲正（按に、兵庫頭従五位上源仲正は、従三位頼政卿の父にて、大治頃の人なり。）元日戀「ちよまでもかげをならべてあひみんといはふかゞみのもちゐざらめや」から餅にいひかけたる歌どものあるによりてなる事、既に『山口栞』にも見えたるが如し。然れども、假字づかひみだれたる世の歌どもを證として、うけばりてしか定めむ事はいともくおぼつかなし。……

抑假字づかひを證とすべきは、天暦以往にかぎる事にて、それより以來は信（タノ）みがたし。されば『古今集』の作者の歌には、さるあやまりふつにみえねど、『後撰集』時代の人には、そのたがへるふしすくなからず。（編者いふ、已下、粟津に不レ逢をいひかけ（兼盛集、十二ノ右）粟に泡をかね（重之集、五ノ右）河伯に乾をかけ（蜻蛉日記、下之下廿六ノ右）淡に泡をかね（空穗物語藤原君、卅五ノ右）直衣に名をしをかねたる例（源氏物語末摘花、卅一ノ左）また尚の假字をなをとかける例（風俗歌の彼乃行・公任卿眞蹟本近江御息所歌合）梅をむめ洙雪をあはゆきとかき（浪華帖所載の行成卿眞蹟和歌）遠をとを、不レ乾をかはかずとかける例（浪華帖所載の公任卿眞蹟萬葉集和歌）等を列擧して、後世假字づかひの本とすなる、順朝臣の倭名鈔にすら、無万（馬）無女（梅）のたがひあれば、ましてその天暦頃より、百年ばかりくだりたる世の歌調をもて、徵とすべしや。とかく上件に論らへる如く、ワ行一段の活きを必定といふべきなりけりと論定せり。事長ければ、これを省略したり。

五　堀秀成

（用字活用考）

用（モチヰ）の言の意は、持居（モチヰ）にて、是を持て彼（カシコ）に居（スエ）、彼（カレ）を持て是に居（スウ）る意也。試（コヽロミ）の心見、率（ヒキヰ）の引居などの例也。ゐの音の下につく言は、大方他の言の下に居言の合へるがおほければ、もちゐも持居なることをおもひ定むべし。

（假字本義考　○詞の八衢補正にも）

六　田中頼庸

もちゐのモチは持さすらひ・持かゝのみ・持いつくなどの持に同じくヰの緣におくつよめの辭なり。ヰは引率（ヒキヰ）・墜居（オリヰ）と同例にて、此辭の主はヰが一語に係れり。『神代紀』の歌に「かもどく島に我ゐねし」『用明紀』に「側（ヰイ）助（タスク）大連（イはヰの韻なり。）」『齊明紀』に「引（ヰイ）構（アハセ）唐人」『靈異記』に率注に「率爲天（ヒキヰテ）」などあるヰと同じく、親しく身に引從ふを云なり。

國（カナ）字の證に至ては、『神代紀私記』に用を毛知爲とある是なり。『藤原君に』「高きくらゐをもちゐるべからず」

『濱松物語』に「人にもちゐらるまじき御契に」『蓬生』に「世にもちゐらるまじき老人さへ」『夕霧』に「もちゐるべき事ならず」『蜻蛉日記』に「夢をも佛をももちゐるべしやもちゐるまじや」『年中行事裝束抄』に「七日の中にもちゐるべからず」

かくもちゐの辭はヰが主にて國字は『私記』の毛知爲を證とし、受辭は『藤原君』を始て、諸書にべし・まじとあるを據として考ふる時は波行といふ說は始より論らふにも足らぬ非なり。今其證とすべき限を擧て、和行に定れるよしを明すこと左の如し。

モチヰの國字の證

『神代紀上私記』應永廿九年本に「知岐里志古斗乎毛知爲須志天」文祿本も亦同じ。但爲を草の爲に作る。○『紫式部日記』心もちゐ○『類聚名義抄』毛千井○『字鏡集』以・裝。モチヰ○『年中行事裝束抄』用ヰル

もちいる(用)

受辭の證

『夕霧』五一オともかくももちゐるべき事ならず。『蜻蛉日記』佛をももちゐるべしやもちゐるまじや。○『建暦三年下藺新制』もちゐるべし。○『八雲傳』廿九ウ古歌に有む程の言をもちゐるべし。○『裝束抄』上袴浮文をもちゐるべし。以二公物一もちゐるべし。例の定の浮文をもちゐるべし。有文をもちゐるべし。無文のかぶりをもちゐるべし。象眼をもちゐるべし。青裏をもちゐるべし。以上

『藤原君』廿一オ拙き身は高き位をもちゐるべからず。○『建暦新制』よき下緒を付もちゐるべからざる事。金銀の緒もちゐるべからざる事。○『裝束抄』袴は七日の中にももちゐるべからず。青色を近日はもちゐるべからず。以上

『裝束抄』上達部もおとなしき人はもちゐるべけれど以上

もちいる（用）

右用ゐるをべし・まじと受たる辭にて、波行ならぬ證なり。若し中二段ならば、用ひ用ふると活くめれば、べし・まじなど受べき謂なし。

羅行下二段に轉り活ける證

『濱松』三、四 二オ かくもちゐられ思はれ給へるか。○『榊』四七ウ 世にもちゐられて、○『少女』一二オ 才の程よりはもちゐられず。○『歌庭訓』一六オ 痛くもちゐられぬ類の歌を、○『唐物語』三八ウ もちゐられざりければ（印本ヰをヒに作るは、清水氏の意改なれば、今は古本による。）『同』四一ウ 世にもちゐられ、四六オ 時にもちゐられたり。以上

『濱松』二、二 四ウ 人にもちゐらるまじき御契に、○『蓬生』一六ウ 世にもちゐらるまじき老人さへ、○『裝束抄』劒をもちゐらる。○『行阿假字遣』もちゐらる○『類字假字遣』もちゐらる 以上

『少女』六ウ 世にもちゐらるゝ方も、一一ウ 世にもちゐらるゝ人は、一七ウ 世にもちゐらるゝ物に侍れ。○『裝束抄』一重をもちゐらるゝ時もあり。子孫をもちゐらるゝ。以上

『裝束抄』下重は色あるをもちゐれども、

右羅行に活ける證なり。但もちゐらるれとも活く例なれど未見當らず。

るゝと結ぶ例

『孝德紀』一三オ 要須（カナラズモチヰル）臣ノ翼（タスケテ）○『裝束抄』七日まではこれをもちゐる。若き時も皆もちゐる。厚き唐きぬをもちゐる。表袴も平絹をもちゐる。有文をもちゐる。綾の絹を交へてもちゐる。○『色葉字類抄』用、モチヰル○『文選』任、モチヰル○『續古事談』賢王はこれをもちゐる。

むと結ぶ例

『類史』三四、帝王 御願寺の塔木爾用（モチヰムカ）牟我爲爾斗之天、○『欽明紀』二七ウ 軍者隨ニ王所須（モチヰム）印本ヰを一イに誤る○『天武紀』下一〇オ 四方

爲大解除用物（モチキンモノハ）　○『唯信抄』モチキム

ずと結ぶ例

『神代紀』上不レ用（ズモチキ）　○『裝束抄』近衛司などはもちゐず。くゑんしやう彫たるはもちゐず。劍笏をもちゐず。

○『唯信抄』モチキズ　以上

右に掲る證例を考へ亘して、もちゐの和行に定れる理をこそ悟るべけれ。……大概和行と波行の爭ひは只モチのみを捕へて說を立る故に、己が心のひくかたにキルともフルとも活くやうに思ふめれど、キの一語を主に立て見むには、寧言（ムシロ）を費さずとも、語學に明かならん人は、心から和行と悟るより外に道あらじとぞ思ふ。

（大八洲學會雜誌卷の八）

七　榊原芳野　『古事記傳』に、源仲正の集を引て、用字の活用をば、は行中二段の者とす。元亨・建武前よりは、は行中二段の活も雜じれりと見えて、『伏見院天皇薫物合』の文中、用ふの語あり。されど、用を餅（モチヒ）にいひかけたるは、所謂雙關にして、假借の音なること、卽「あしひきの山居（キ）」を病といひなし、「今や今や」を「うまやうまや」と通ぜしと同じ。且假字の違なしともいひがたき時代の歌なれば、かたくたしかなる證とは爲難し。然れば中島・萩原二氏の和行一段の語とは定められしなり。

さるを『蜻蛉日記』の「用ゐるべしや、用ゐるまじや」の一語にては、信難（ウケガタ）しとて、後世の中二段に據れる書ども、此頃はかつ〳〵見ゆれど、彼用ゐるの例は、諸書に多し。『蜻蛉日記』の文章の、やすらかならぬと誤多きは人の知る所なれば、疑あらんは理なれど、我が一わたり見し書の中にも一段なる例證猶多し。……

古き書には『宇治拾遺物語』十四「唐綾一（ッ）をば唐には美濃五匹がほどにぞ用ゐるなる」（俗本ゐをひに作る。古寫本はゐに作れり。）　又寂蓮自筆の『薫集類抄』には「少しなりとも黑方を用ゐるべ

もちいる（用）

きなり」又『公事根源』中「孝經・禮記・毛詩・尚書・論語・周易・左傳・年々めぐりてもちゐる」又『神皇正統記』一「文字をもちゐる事は之より始れり」又『古本遍照發揮性靈集』四の傍訓に「能書必用ハ好筆ニ」とあり。されば中古までは、漢文を讀むにも、用ひ・用う・用ゆなどの訛はなかりしと見えたり。

（洋々社談五五號、用の字の活）

八　木村正辭

用の字の活用は、若狹の義門師の『山口栞』に、和行一段のはたらきにて、もちゐ・もちゐるとかくべき由の說出たるより、近世大かたは、其說に從へるを、猶かの『古事記傳』の說によりて、波行中二段とし、もちひ・もちふるともするる人のこれかれみゆるは、あかず口をしきことなり。……今『記傳』の文を出して、其說の全く非なるよしを辨へんとす。（編者いふ、古事記傳の文は前に出したれば、これを略せり。）

此に、「仲正は、『後撰集』の作者なれば、いまだ假字の亂れざりしほどなり」とあるは誤りなり。此仲正は、賴政卿の父にて、『後撰』の作者の中正とは別人にて、（後撰なるは中正にて、中の字に人偏はなきなり。）かへりて經衡・俊賴などよりも、少しおくれたる人なれば、假字の證にはしがたきなり。

『夫木集』廿七、鷹部に、此仲正の歌をのせたるにも、木居（コキ）を戀（コヒ）にいひかけたるがあり。（編者いふ、「いとせめてこひをすだかはしたはれと人の心はとりもかはれず」とあり。）其誤り、用を（モチヰ）餅（モチヒ）にいひかけたると全く同じ。しかるを、本居翁は『後撰』の中正と思ひ誤りたるから、此歌を證には引（キ）たるなり。賴政卿の父なることを知りたらんには、いかで此に引出で證とはなすべき。其故は、此人より先輩なる、經衡の歌をば、分注に出し、傍例とし、且「仲正は『後撰集』の作者なれば、假字の亂れざりしほどなり」とことわれる、本居翁の意おもひやるべし。さるを、これらの辨別をもなさずして、ひたぶるに翁の說を尊信するは、かへりて翁の意に背くものなり。心を平らかにしてよくおもふべきなり。

本田日神

かくてまた、こゝに一説あり。其は經衡・仲正などの時代には、餅の字の假字を誤りて、もちゐとかきならへるにより て、用の假字のもちゐにいひかけたる歌の、これかれあるならんとおぼゆ。其は先『行阿の假字づかひ』と云ものに、「朝餉（あさがれゐ）餅（もちゐ）」と見え、此おなじつらに、「用・庸（もちゐる）」とあり。但此書は、うけばりてとりがたきものなれど猶例あり。『和名抄』官職部に「大炊寮（於保爲乃豆加佐）」とあり。天智紀の旁訓、又類聚名義抄にも、オホヰノツカサとあり。於保爲は大飯の義なれば、正しくは於保比とあるべきなり。これによれば、飯の假字をイヰと誤りしから、餅（モチヰ）を用（モチヰ）にいひかけたるものにて、かの歌どもは、かへりて用の字の假字は、ヰなりといふかたの證とこそすべけれ。さるをこれによりて、用の字の假字を、波行と定めしは顚倒の説とぞいふべき。假字は時代によりて異りあるものなれば、よく〳〵時代を正して、證にはすべきことにこそ。

（好古雜誌明治十五年十二月號）

もちいる（用）

岩崎美隆の『もちふといふ詞の用格』の奥に加納諸平書して、

諸平云、義門がもとより、こぞの夏の頃のさうそこに、『古事記傳』に『後撰』の作者とて引れたる仲正は頼政の父の仲正をおもひたがひられたるなれば、もちひの假字わろしと、清水光房よりいひおこせつとて、もちゐにさだめたるよし書したりき。げにとうべなひをりしを、かくさ〳〵の明證あれば、もちゐにさだむべくなん。此頃義門がとひ來れるに、この説をみせしかば、いとよろこびはべりき。云々

といへり。されば、仲正に關する辨駁は、はやく清水光房の説なりしなり。猶頭書に光房の按をも書したれば、左に記すべし

源兵庫頭仲正は、三河守頼綱の男、頼政の父にて、白河院の北面、『金葉集』以下の作者也。『後撰集』秋

もちいる（用）

上に、源中正、「雨ふりて水増りけり天の川こよひはよそにこひんとやみし」と出たるは別人にて、近院右大臣能有公の子にて、延喜の頃の人なり。『西宮記』にも源中正と見えたる人なり。『夫木抄』に引る『仲正家集』と云は、兵庫頭仲正にて、藤經衡よりも、同時ながら少し後れたるべし。經衡は『後拾遺集』より見えたる作者也。俊頼の「けふよりはわれをもちひのますかゞみ」とよめるも同時にて、みな假名づかひ亂れたる時なれば、たしかなる據とは定めがたし。此傳、中正と仲正とを混じたるより誤れり。

九　大槻文彦　（編者いふ。初に契沖・谷川士清・楫取魚彦・本居宣長・義門・中島廣足・『俚言集覽』・榊原芳野の説を擧げたれど、これを略せり）

右の説どもを參考するに、もちゐ・もちゐるとする説、着々考證ありて、動かすべからざるが如し。もちゆは固より論ずるに足らず。もちひ・もちふの考據も甚だ弱きが如し。何となれば、もちふ・もちふると用ゐたる證一つも出でざるのみならず、其のもちひも、榊原氏・村田氏の考に據れば、いひかけとも訛とも言ふべければなり。

又もちゐ・もちうの説も承けられず。もちう・もちうると用ゐたる證もさらに無ければなり。『崇神紀』に、「急居此曰ニ菟岐宇一」とあればとて、異なる語を取りて證とするは、確ならざるのみならず、急居をつきうといふこと、唯本書に一處見えたる異例にて、此他さらに見えずして、後の諸書には、すべて音便に、ついゐるとのみ用ゐたり。されば、もちゐる・つきゐる・ひきゐる等の語は、共に其語尾は、ゐる・ゐれ・ゐの變化なりと斷定すべし。

（言海凡例の九頁〇復軒雜纂、洋々社談（八三號）にも）

此の他、文部省編輯寮の『語彙』一の五七丁　またワ行一段説にして、『持統天皇紀』に「不レ惟ハズ忠ヲ　宣ニ揚

キラル、コヽヲ本職一一とあるを引用せり。

本田日神

本職（キラル、コマヲ）」とあるを引用せり。

また佐藤誠實は、『語學指南』三の三六丁に、『モチヰル用　書冊中多く此の活としたり。モチフルと波行中二段に活きたるは極めて少し。』と記せるを見れば、何れとも決定せざるが如くなれど、『國家教育』第一二號文字と聲音との關係。に『夫木集』に「千代までも影を雙べてあひ見んと祝ふ鏡のもちひざらめや」とあるは、この比はもちひ餅をもちゐといひしからにもちゐ用にかけたるにて、今の板本の『夫木集』にももちゐとあり。これによりて、用の字の假名をもちひとするは誤なり』といへれば、ワ行上一段說なりしなり。

落合直文もワ行一段說にして、其の說『新編假名遣』に見えたれど、先輩の說を蹈襲せるのみなれば、これを省略せり。

また『黑川眞頼全集』第六の三四七頁に『用ひは古き格に從ひて用ゐとあるべし。用ひといふは、ヰのヒに往來せるものにて後の格なり。中古に至りヰをヒといひ、ヒをヰといふことあり。かかる類は改めて古き方に從ふべきものぞ』といへるも、ワ行上一段說なるべし。

五　モチヰル・モチウル

落合直澄

（上一段）『蜻蛉日記』もちゐるべしや。『源氏夕霧』もちゐる人々は、『伊呂波字類抄』用モチヰル

（上二段）『寛永板倭玉篇』庸モチウ　用モチウル

以上正格なり。以下轉訛を擧ぐ。

『遊仙窟』モチユ　『伊呂波雜韻』モチイ・モチユ・モチユル　『源仲正家集』祝ふ鏡のもちひざらめや。『著聞』一用ひざりければ、『慶長板節用』モチフ　『定家かなづかひ』もちひ又もちゐる

以上轉訛語を擧げたるは、末を探て源を知るべき法を示

せるにて、譬へば、ゐはい・ひと轉訛し、うはゆ・ふと轉訛すべき理なれば、用いるの源語は用ゐるにして、用ゆ・用ふの源語は、用うなりといふ理が知らるゝなり。

（皇典講究所講演一六、詞考筆錄）

用（モチヰ）は和行動詞なりと定めたる、義門師の說は動くまじきなり。突居（ツキヰ）・以將（モチヰ）・引將（ヒキヰ）は同種の詞にて、突居は異論なければ姑く置き、引將は、『新撰字鏡』に、「攜　兒比支井天由久」ともあれば、是れも論なかるべし。されどもちゐ・ひきゐは古くより判然せざりしにや、『類聚名義抄』『定家假名遣』などに、モチヰル・モチフルと二樣に記せり。『井蛙抄』などにはもちゆとも書けり。引將も、ひきゐる・ひきゆる・ひきふるなども書けるもの多くして、以將（モチヰ）・引將（ヒキヰ）は、轉訛語に至るまで、全く同じ動詞なりと知るべし。されば、もちゐもひきゐと同じく、和行動詞なりといふことは混はしき事なかるべし。

又續動詞より他へ轉じ、動（ハタラ）く例は、せめぐ（閲）　ためす（試）　ふける（耽）　とぢむる（結）　うけふ（誓）　むせぶ（咽）　しきる（頻）　まゐる（參）　ねぢる（捻）　こひし・さびし・わびしなど、聊見えたれど、四段の續動詞より、上下一段・上下二段・形狀言の五種に轉じ動くことは、動詞三千言中、一つだにあることなし。然れば四段のもちより、上二段にもちひ・もちふると轉じ動けりとする說は、無據の說なるをや。但し以將（モチヰル）とする說は、以（モチ）と將（ヰル）と二言にて、轉言に非ず。混ふべからず。

又もちふと動けりとする說は、意味に於ても叶ふまじきなり。如何となれば、もちふのふには意味なければ、唯もちといふに異ならざればなり。もちゐるとすれば、以將の義にて、意味に於て、いとよく叶へり。

又もちゐ・もちゐると書ける例は『源氏』『濱松』『唐物語』『紫式部日記』『裝束抄』などにいと多し。そが中に『應永

本日本紀私記』「知岐里志古斗乎毛知爲須志天（チギリシコトヲモチヰズシテ）」などあるは確なり。

（皇典講究所講演二五、詞考筆錄）

○

用いるの假名遣に關する衆說は、以上擧げたるがごとし。なほ行阿の『假名文字遣』には「もちひて　用・庸」二五丁「もちいらる　被用」三三丁「もちゐる　用・庸」三六丁と三樣に定めたり。

中島廣足は『詞のやちまた補遺』上の二五丁に「もちふる・もちゐる」此假字、『記傳』に定められたるが如くにては、活もこの編者いふ、ハ行中二段活をさせり。なるを、近ごろ『山口栞』にいへる說ありて、其證例どもによる時は、和行一段の活なり。……しかるを『稜威道別』一の巻に「云々取用ゆ」とかきたるは、いづれにもつかで非也」といへり。ハ行上二段活・ワ行上一段活併用の說なるか。あるひは未定說なるか明ならず。

もとい（基）

一　モトヒ

行阿の『假名文字遣』二六丁に「もとひ　基」とあり。

二　モトヰ

契沖　基　もとゐ。未考得。本居（モトヰ）の義なるべし。（和字正濫鈔二の二四丁）

鹿持雅澄（萬葉集古義活版本巻九の一〇丁）は、「田井（タヰ）・雲井（クモヰ）などと同じ例にて、ヰはそへていふ辭なるべし」といへり。